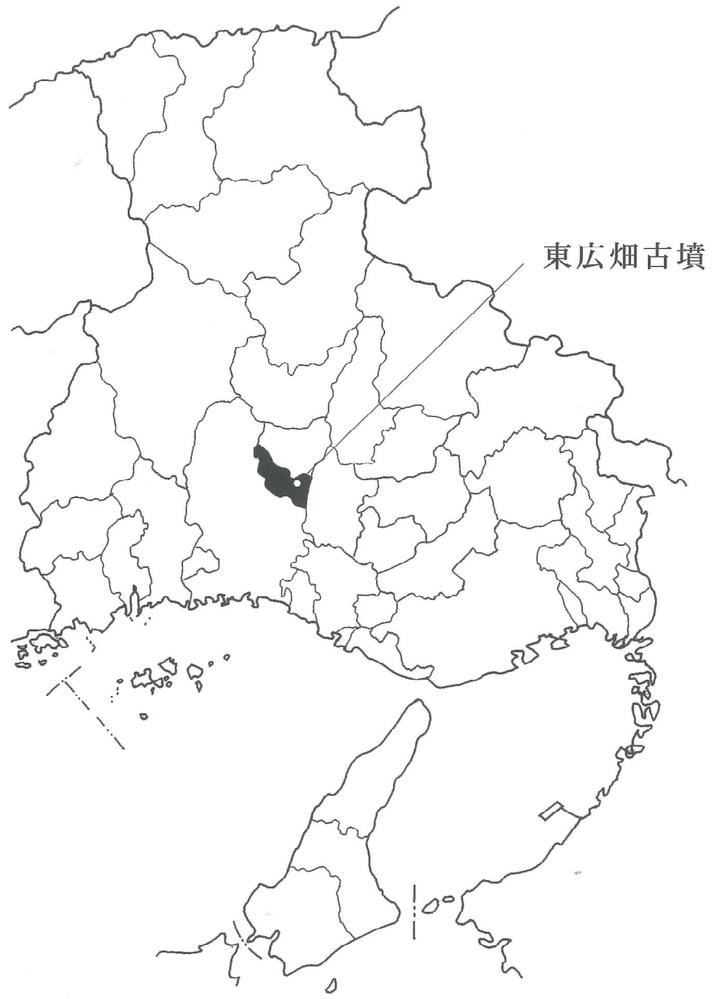
福崎町埋蔵文化財調査報告書13

東広畑古墳 I

2015

兵庫県神崎郡
福崎町教育委員会

東広畑古墳 I



2015

兵庫県神崎郡

福崎町教育委員会

整備前の東広畑古墳

整備後の東広畑古墳

石棺出土状況（奥壁に向かって）

石棺下土器出土状況（石室内開口部から）

古墳出土須恵器

装飾壺　小像部分拡大

円頭大刀柄頭

耳環（左）、勾玉（右）　　馬具

あ　い　さ　つ

埋蔵文化財は、地下に埋もれた歴史を伝えてくれる大切な資料のうちの１つです。

福崎町内には、約４０基の古墳が存在していますが、発掘調査が行われた古墳は少なく、町内の古墳について知る手がかりが少ないのが現状でした。

県営ほ場整備に伴い、平成５年度、６年度、１４年度、２０年度と複数年かけて東広畑古墳の調査を行いました。調査前の古墳は、後世の削平によって墳丘がほとんど残っていない状態でしたが、古墳基底部の残りがよく、調査によって土器や鉄器等、豊富な遺物が副葬されていたこと、直径約１６ｍの円墳であることが分かりました。このように、私たちに多くの情報をもたらしてくれていることから、平成９年に町の史跡に指定しました。

平成２２年度には、兵庫県立考古博物館の協力を得て、一部の鉄器のＸ線写真を撮影したところ、象嵌（ぞうがん）が施されている大刀が確認されました。その中に、亀甲繋単鳳文（きっこうつなぎたんほうもん）という県内でも類例のない模様が見つかったため、平成２３年度から平成２５年度にかけて、他の鉄器の保存処理を行い、その成果を展示等で公開しました。

本報告書の刊行によって、１人でも多くの方に東広畑古墳のことを知っていただき、福崎町、ひいては播磨地域の歴史を紐解くための資料にしていただければ幸いです。

最後になりましたが、調査や整理等の過程でご指導いただきました多くの方に厚くお礼申し上げます。

平成２７年３月

福崎町教育委員会
教育長　髙寄　十郎

例　　言

１．本書は、神崎郡福崎町西田原字東広畑６２６に所在する東広畑古墳の発掘調査報告書である。
２．調査は、福崎町教育委員会が主体となり実施した。
３．経費について、平成５年度、平成６年度の調査は、兵庫県姫路土地改良事務所（現：兵庫県中播磨県民センター姫路土地改良センター）が負担し、平成１４年度、平成２０年度の調査は国庫補助金（総事業費の1/2）並びに県補助金（総事業費の1/4）を使用している。
４．本書に使用した方位は、基本的に磁北を示している。
５．周辺の遺跡分布図は、平成３年測量、平成１８年改測・発行の「福崎町都市計画図(1/2,500)」を縮小、編集したものである。
６．本書の執筆は、第１章、第２章、第３章第１節、第２節２、３を社会教育課 主事の樋口碧が、第３章第２節１を元福崎町文化財専門員の古田陽（現姓 小船井）（現：羽咋市教育委員会文化財室 主事）が行い、編集は樋口が行った。
７．遺構の実測、写真は、発掘調査時の担当であった元社会教育課 係長の出田直が行った。
８．遺物実測・写真は古田、樋口が行い、梶智美、渡辺昇（福崎町文化財審議委員・兵庫県まちづくり技術センター 副課長）の協力を得た。
　遺物の洗浄・接合・復元・トレース、遺構のトレース等は古田が行い、梶の協力を得た。
９．出土金属製品の保存処理は、耳環を兵庫県立考古博物館に協力いただき、それ以外を公益財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
10．本報告に係る図面、写真、遺物等は福崎町教育委員会にて保管している。
11．調査及び整理作業には数多くの方々や機関にご指導、ご助言をいただいた。感謝申し上げる。

本文目次

あいさつ・例言
第１章　地理・歴史的環境
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 2
第２章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯 …… 3
　第２節　調査体制 …… 4
第３章　調査報告
　第１節　遺構 …… 5
　第２節　遺物
　　１土器 …… 9
　　２金属器 …… 17
　　３その他 …… 22
遺物観察表 …… 23

図版目次

巻頭図版１　上　整備前の東広畑古墳　　下　整備後の東広畑古墳
巻頭図版２　上　石棺出土状況（奥壁に向かって）　下　石棺下土器出土状況（石室内開口部から）
巻頭図版３　上　古墳出土須恵器　　下　装飾壺　小像部分拡大
巻頭図版４　上　円頭大刀柄頭　　下左　耳環、勾玉　　下右　馬具

第１図　周辺の遺跡分布図 …… 1
第２図　第１次調査位置図 …… 6
第３図　トレンチ１～８上層図 …… 6
第４図　前庭部遺物出土状況図 …… 6
第５図　石室内断面図 …… 7
第６図　石室床面平面図・側面図 …… 7
第７図　石室内排水溝平面図 …… 7
第８図　石棺下土器出土状況図 …… 8
第９図　石棺実測図 …… 8
第10図　出土土器１ …… 10
第11図　出土土器２ …… 11
第12図　出土土器３ …… 12
第13図　出土土器４ …… 13
第14図　出土土器５ …… 15
第15図　出土金属器１ …… 17
第16図　出土金属器２ …… 18
第17図　出土金属器３ …… 19
第18図　出土金属器４・その他遺物 …… 21

写真図版１　遠景（東から）/全景（北から）/前庭部土器出土状況（東から）/前庭部土器出土状況（北から）/周溝検出状況/周溝確認調査状況
写真図版２　石棺除去後状況/石棺下遺物出土状況/羨道部から奥壁（西から）/石室奥壁付近/耳環、高坏蓋出土状況/開口部から石室/石室内作業風景
写真図版３　排水溝検出状況（西から）/排水溝検出状況（東から）/奥壁付近排水溝/石室内（西から）/復元作業（南西から）/復元作業（北東から）
写真図版４　出土遺物１
写真図版５　出土遺物２
写真図版６　出土遺物３
写真図版７　出土遺物４
写真図版８　出土遺物５

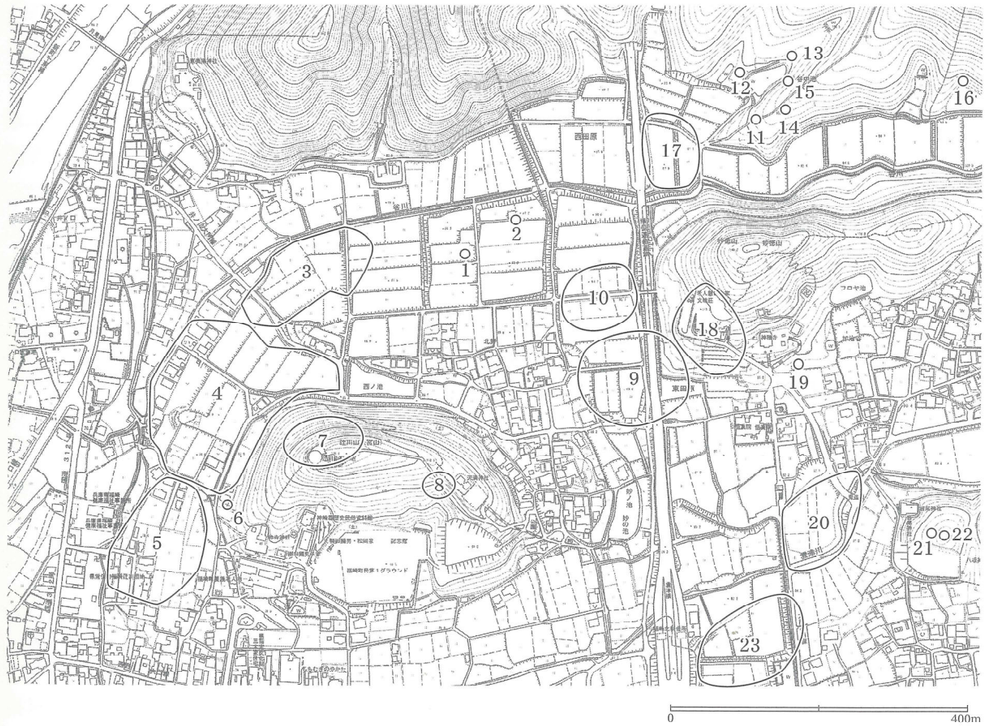
第１章　地理・歴史的環境

第１節　地理的環境

福崎町は、兵庫県の中央部よりやや南側に位置している。当町の東側には加西市、西及び南側には姫路市、北側には市川町が隣接する。

地理について、当町は中国山地のほぼ東端、播但山地内の播磨側の市川と、但馬側の円山川を結ぶ谷筋、円山断層上に位置している。地形は、中国縦貫自動車道沿いに山崎断層があり、北側と南側の両山地間における幅約１kmの凹地帯になっている。当町は、このような播但山地を縦・横断して走る重要な地形的凹地帯、円山断層と山崎断層が交会する重要な場所に位置している。当町を南北に貫流する市川周辺には谷底平野、河岸段丘が発達している。

調査地である西田原地区は、市川の東岸にあり、市川支流の雲津川、谷川が流れており、地形区分上は谷川と雲津川に挟まれた段丘と位置付けられる。東広畑古墳は谷川南岸に位置している。



第１図　周辺の遺跡分布図

１．東広畑古墳　２．東新田古墳　３．西広畑遺跡　４．上大明寺遺跡　５．下大明寺遺跡　６．宮山遺跡　７．西広岡遺跡　８．北広岡遺跡　９．北野寺西遺跡　10．北野寺山西遺跡　11．大畑１号墳　12．大畑２号墳　13．大畑３号墳　14．大畑４号墳　15．池ノ谷中池遺跡　16．尾森古墳　17．西田原穴田遺跡　18．妙徳山遺跡　19．妙徳山古墳　20．加治谷藪下五反畑遺跡　21．ビワクビ１号墳　22．ビワクビ２号墳　23．大門岡ノ下遺跡

第２節　歴史的環境

東広畑古墳周辺の遺跡は、町指定文化財　壺棺が出土した宮山遺跡（６）がある辻川山（宮山）を中心として、周辺の段丘上に分布している。大門岡ノ下遺跡（２３）からは、縄文時代晩期の住居跡、縄文土器、石棒、石皿、磨石、敲石が出土している。西田原穴田遺跡（１７）からは、縄文土器や石鏃、サヌカイト等が出土し、縄文集落の存在が示唆される。

弥生時代の遺構として、上大明寺遺跡（4）、北野寺山西遺跡（１０）、西広畑遺跡（３）から集落跡が見つかっている。また、北野寺西遺跡（９）からは、円形周溝墓が１基見つかっている。辻川山頂上付近からは、弥生土器片が採取されており、弥生時代における当地域では、広範囲に遺跡が展開していると考えられる。

古墳時代の遺構として、古墳時代後期の古墳や集落遺跡が見つかっている。東広畑古墳の１００ｍ東には、古墳時代後期の東新田古墳（２）が存在する。直径約１６ｍの円墳で、須恵器、大刀、馬具、鉄鏃、勾玉、管玉が出土している。また、東広畑古墳と同様に銀象嵌が施された大刀が見つかっており、近接したほぼ同時期の古墳から銀象嵌が施された大刀が見つかったことは、当町の古墳時代の他地域との交流のようすを考える上で重要である。周辺には、古墳時代後期の大畑群集墳（１１～１４）、尾森古墳（１６）、直径２０ｍ以上の円墳であると考えられるビワクビ１号墳（２１）、２号墳（２２）、古墳時代終末期には神崎郡内でも最大規模の妙徳山古墳（１９）が存在する。妙徳山古墳は、直径約３５ｍの円墳で、刀子や須恵器片が見つかっている。また、妙徳山遺跡（１８）からは、箱式石棺墓が確認されているが、時期は不明である。

大畑群集墳に近接する池ノ谷中池遺跡（１５）からは、未成品である古墳時代の須恵器が見つかっており、窯跡は確認されていないが、灰原である可能性が高い。当町では、古墳時代の窯跡は確認されていないが、当地域に古墳時代の窯跡の存在を示唆するものである。

古墳時代の集落遺跡では、加治谷藪下五反畑遺跡（２０）から造り付けカマドを有した竪穴住居跡や総柱の掘立柱建物が３棟見つかっている。妙徳山古墳及びビワクビ１号墳、２号墳の時期と同時期であり、これら古墳と関係する集落と考えられる。西広畑遺跡からは、溝状遺構が見つかっており、集落遺跡の存在が示唆される。近接する東広畑古墳及び東新田古墳が西広畑遺跡の方に向かって開口していることから、両古墳を造営した人々の集落であると考えられる。

奈良時代以降の遺構として、北野寺西遺跡から平安時代の竪穴住居や中世の掘立柱建物、溝状遺構が見つかっている他、加治谷藪下五反畑遺跡から平安時代の掘立柱建物が１棟見つかっている。

参考文献

福崎町教育委員会町史編集室編　1995　『ふくさき史話』
福崎町立神崎郡歴史民俗資料館　1998　『福崎の埋もれた歴史Ⅰ~田原地区~』
福崎町立神崎郡歴史民俗資料館図録No.4

第２章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

第１次調査　平成５年７月６日～８月３１日（平成５年度）

調査に至る経緯

平成５年度当時には、すでに後世の削平を受け盛り土がなくなり、主体部である横穴式石室が外側から見られる状態となっていた。戦後しばらくの間は、ここにも墳丘が認められ、基底部も現在よりは分かる状況を示していたようである。しかし何時の頃からか、土が取られ、基底部の削平を受け、石室の石材のみが残存する状況になった。しかし、基底部の状況が耕作土直下で確認できる可能性があった。

県営ほ場整備事業が実施されることとなり、事業との調整を行うため、古墳の形態や範囲確認のための調査を実施することとなった。

調査方法

調査を行うにあたって、墳丘の規模を把握する必要があったため、ほ場整備により掘削される古墳の北側にトレンチを開け、調査を実施した。

掘削は地表からすべて人力にて行った。適宜、図化及び写真撮影にて記録をとった。

第２次調査　平成７年３月１５日～３月２９日（平成６年度）

調査に至る経緯

平成５年度に、ほ場整備事業が実施され、周辺は地形が激変していた。ほ場整備の際に調査を実施したが、１次調査は調査区が限定されていたため、古墳の規模や時期は、はっきりとしなかった。そこで一部にトレンチを開け、規模確定の調査を実施した。

調査方法

古墳南側にトレンチを開け、古墳の規模の把握及び遺物等の資料収集を行った。

掘削は地表からすべて人力にて行った。適宜、図化及び写真撮影にて記録をとった。

第３次調査　平成１４年１０月１日～平成１５年３月３１日（平成１４年度）

調査に至る経緯

第１次調査、第２次調査により、古墳の形態と規模が確定し、古墳の時期を知るための資料を得ることができたため、平成９年度に土地が公有化され、町の指定文化財になった。しかし、石室について、調査後は現状維持としてきたところ、石材の劣化が著しく、危険が考慮された結果、古墳整備をすすめることとなった。

古墳の整備をすすめるに要する資料を得るため、石室及び石室内の状況を把握するための調査を実施した。

調査方法

石室内は埋土等で約１ｍの高さまで埋まっていたため、人力にて土をかき出す作業を行った。石室内に入っての作業であり、石材の崩落の可能性があったため、注意喚起しながら調査を実施した。

適宜、図化及び写真撮影にて記録をとった。

第４次調査　平成２０年９月～１２月（平成２０年度）

調査に至る経緯

古墳の傷みが激しく崩壊の危険に陥ったことにより、古墳公園にすることによって石室の保護を図る計画を立て、古墳の石室内の状況を把握するための調査を実施した。

調査方法

人力掘削により調査を実施した。土器の出土状況、敷石の下部構造等を把握し、適宜、図化及び写真撮影にて記録をとった。

石棺部材は、狭い石室内では人力で持ち上げることが不可能であったため、奥壁の天井の開口した部分から石棺の部材を持ち上げ、移動した。

第２節　調査体制

第１次から第４次調査及び遺物・資料整理、報告書作成は、福崎町教育委員会を主体として、以下の調査体制で実施した。

○平成５年度

事務局　福崎町教育委員会

《教　　育　　長》 後藤　十郎　　《社会教育課長》 尾内　伸行

《社会教育課主事》 出田　直

発掘調査担当

《社会教育課主事》 出田　直

○平成６年度

事務局　福崎町教育委員会

《教　　育　　長》 吉識　正明　　《社会教育課長》 白井　爲次

《社会教育課主事》 出田　直

発掘調査担当

《社会教育課主事》 出田　直

○平成１４年度

事務局　福崎町教育委員会

《教　　育　　長》 高岡　章三　　《社会教育課長》 山口　省五

《社会教育係長》 木村　巧　　《社会教育課主査》 出田　直

発掘調査担当

《社会教育課主査》 出田　直

○平成２０年度

事務局　福崎町教育委員会

《教　　育　　長》 岡本　裕　　《社会教育課長》 高井　紳一

《社会教育課副課長》 山下　健介　　《社会教育係長》 出田　直

発掘調査担当

《社会教育係長》 出田　直

○報告書担当

《社会教育課文化財専門員》 古田　陽（現姓 小船井）（平成２２年、２３年度）

《社会教育課主事》 樋口　碧（平成２５年、２６年度）

《整理作業員》 梶　智美

第３章　調査報告

第１節　遺構（第２～９図）

東広畑古墳は、墳丘の残存状況が悪く、石室のみが残っている状態であった。側壁は比較的残存状況が良く、奥壁と天井石、開口部の一部が崩落していた。

前庭部から須恵器無蓋高坏（３２）、蓋（３３、３４）、短頸壺（３６）、提瓶（３７）、平瓶（４１）が出土した。また、開口部からは短頸壺（３５）が検出されており、埋葬後の祭祀に用いられた可能性が考えられる。

古墳の規模や形態を明らかにするため、第１次調査で古墳北側に、第２次調査で古墳南側にトレンチを開けたところ、直径約１６ｍの円墳であるということが分かった。ただし、地形の制約を受け、不整円形を呈していると考えられる。

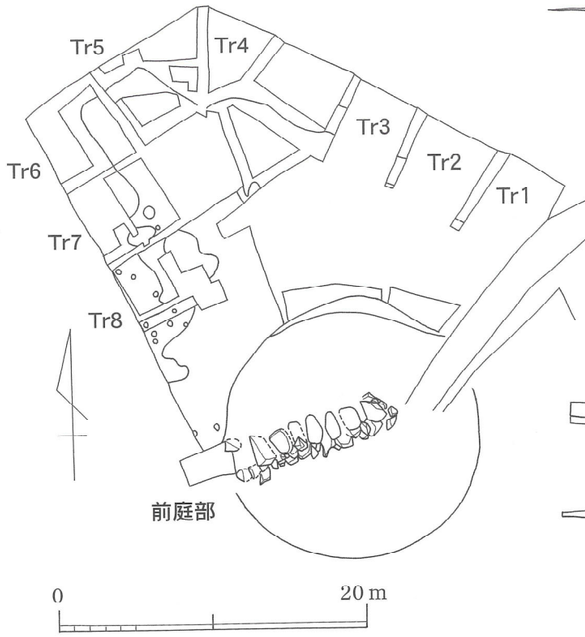
埋葬施設は、西方向に開口する無袖式の横穴式石室である。現状のまま石室を保存するために古墳整備工事を計画し、石室の石材を取り除かなかったので、石室の掘り形は不明である。

石室残存長は約１０m、幅は奥壁付近で約１．６m、開口部付近では約１．５m、最大幅約１．７mの胴張型の横穴式石室である。奥壁は、２石が残存しており、落下していた石材を用いて復元すると、残存している２石の上にやや小ぶりの石材を据えて構成されていた可能性が高い。左側壁の基底石は１０石で構成され、幅１m、高さ４０～７０cm程の石材を据えていた。右側壁の基底石は１１石で構成され、左側壁と同様に幅１m、高さ４０～７０cm程の石材を据えていた。両側壁とも４段で構築されているように見受けられるが、上段にいくほど石材が小ぶりになっていた。

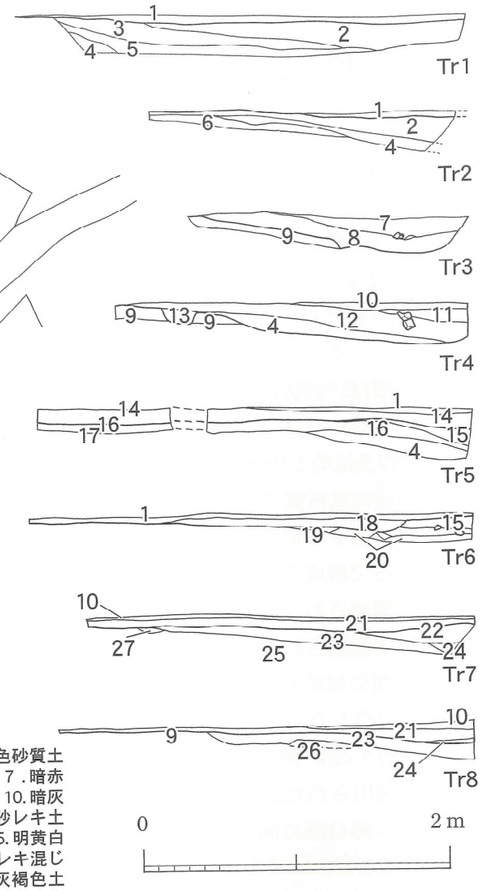
石室床面には直径１０～２０cm程度の円礫が敷きつめられていた。第４次調査で、それら敷石を取り外したところ、排水施設が確認できた。残存長１０．３m、幅２０～３０cm、深さは奥壁側で約３cm、開口部付近で約５cmであった。奥壁から約５０cmのところで直径約３０cmのピットが検出されたが、性格については不明である。

奥壁から開口部に向かって約５．８mのところで組合せ式石棺の底石と小口石が１枚残存していた。石棺を移動させたところ、須恵器有蓋高坏（１８、１９、２２）、坏身（１０、１２、１３）、鉄製の刀と考えられる刃先部分（Ｍ１３）を検出した。石棺の破片が奥壁近くから検出されたため、石棺は追葬後に移動された可能性が高い。

石棺の石材は、「高室石」と呼ばれる加西市高室産の凝灰岩質砂岩が用いられている。

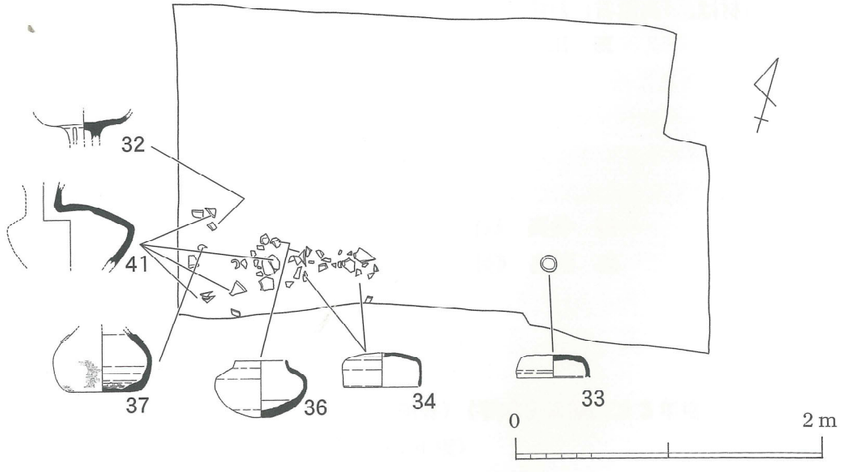


第２図　第１次調査位置図

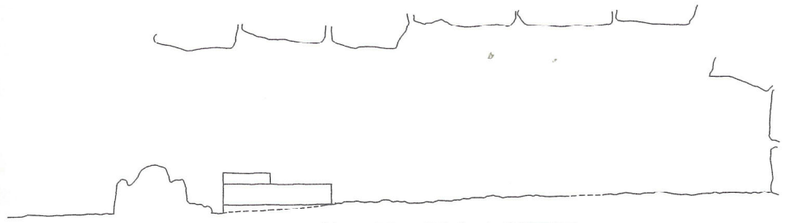


１.暗茶褐色土　２.明黄白色土(レキ混じり)　３.淡茶灰色砂質土　４.暗茶灰色土　５.淡茶灰白色土　６.明黄白色レキ層　７.暗赤茶色レキ層　８.暗灰色土レキ混じり　９.明黄色レキ層　10.暗灰色土　11.暗灰色土(明白黄色粘土混じり)　12.暗赤褐色砂レキ土　13.淡暗灰色土(小石混じり)　14.暗茶色レキ混じり土　15.明黄白色土　16.淡茶灰色土　17.明黄茶色レキ層　18.暗茶褐色レキ混じり土　19.明黄茶色粘質土　20.明黄灰茶色砂層　21.暗灰褐色土　22.暗黄茶色土　23.明灰茶色土　24.暗黄灰色粘質土　25.明黄白色粘土(地山)　26.明黄色粘土　27.明灰白色粘質土

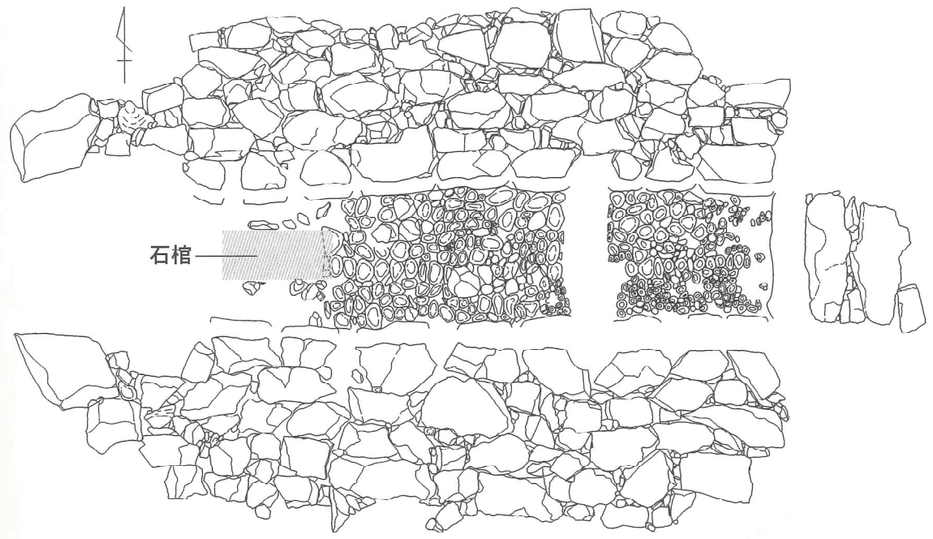
第３図　トレンチ１～８土層図



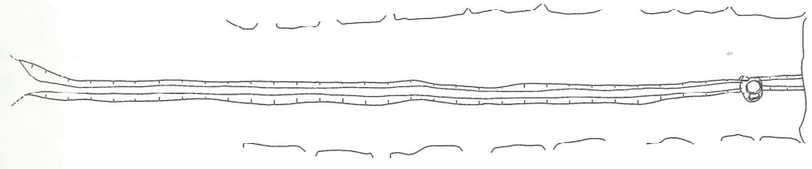
第４図　前庭部遺物出土状況図



第５図　石室内断面図

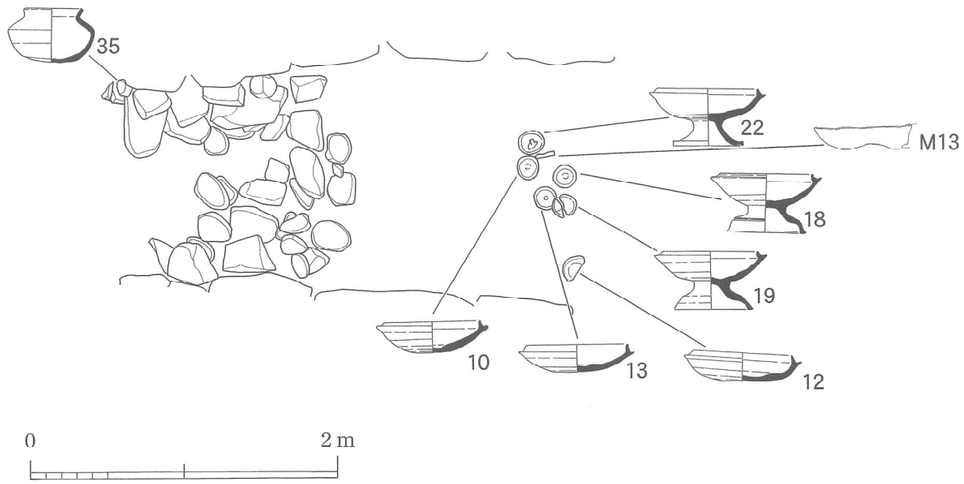


第６図　石室床面平面図・側面図

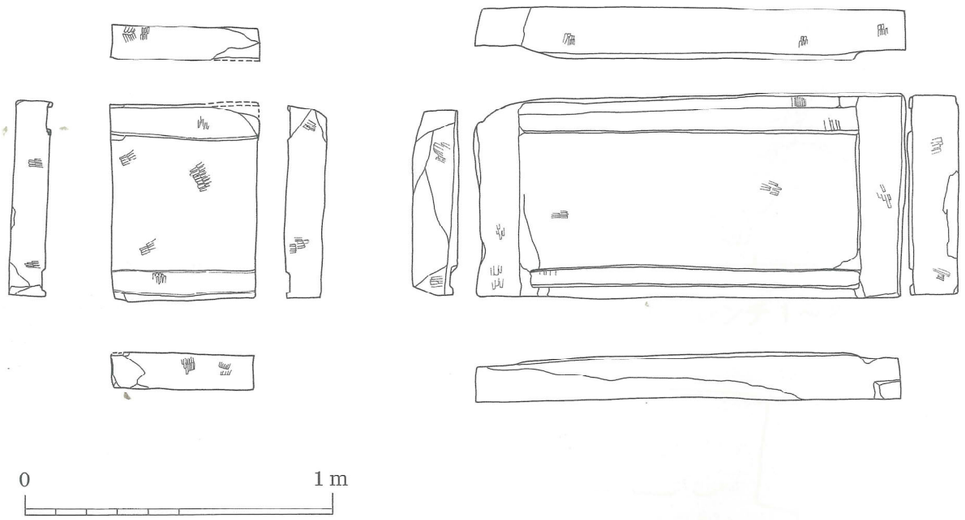


第７図　石室内排水溝平面図

0　2 m



第８図　石棺下土器出土状況図



第９図　石棺実測図

第２節　遺物

1. 土器　（第１０～１４図）

須恵器

器種は、坏蓋、坏身、有蓋高坏、無蓋高坏、短頸壺、壺、提瓶、平瓶等がある。このうち、出土地点が分かるものは、非常に少なく、石棺下からの出土は、有蓋高坏類である。平瓶や短頸壺は、前庭部から出土している。古墳内部出土の須恵器は、完形品に近い姿に復元できるものが多かった。装飾付須恵器については、接合できる部分が限られ、他に同一個体と判断できる破片資料が少ないのが特徴的である。

坏蓋は、法量が口径１３．２cm～１４．４cmのものが大半である。外面の天井部と口縁部の境界を特に意識しないものがほとんどで、口縁部は、やや内傾する鋭い端面を持つもの（４）と、やや丸みを持つもの（２、３、５）がある。蓋の天井部には、工具痕跡を残すものがある。

坏身は、立ち上がりがやや短く、内傾し、矮小傾向が著しいものがほとんどである。平底状の底部から緩やかに外方に開くもの（７、１２、１３、１６）、体部の形状が丸みを持ち、壁高が比較的深いもの（９、１０、１１、１４、１５）と、皿形を呈し、器高の浅いもの（８）等が混在している。底部外面は、回転ヘラケズリを施しているものが多い。１３はヘラ記号があり、１４、１５はヘラケズリが弱く、ヘラケズリの後に仕上げナデを施している。

蓋（１７）は、有蓋高坏の蓋と考えられるが、セット関係は不明である。つまみは、中窪み扁平なもので、天井部と口縁部との境界はわずかに屈曲が見られ、端部はやや丸みを持つ。

有蓋高坏は、ほぼ完形のものが５個体確認でき、短脚のもの（１８～２２、２４、２５）である。坏部は、内傾する短い立ち上がり、脚部は、短脚で透かし孔を持たない。脚部の形状は、内側に屈曲して段をなすもの（１８、１９、２０、２６、２７）、漏斗状に大きく外反するもの（２１、２２）がある。２３は長脚のものである。２６は別の器種の脚部の可能性がある。

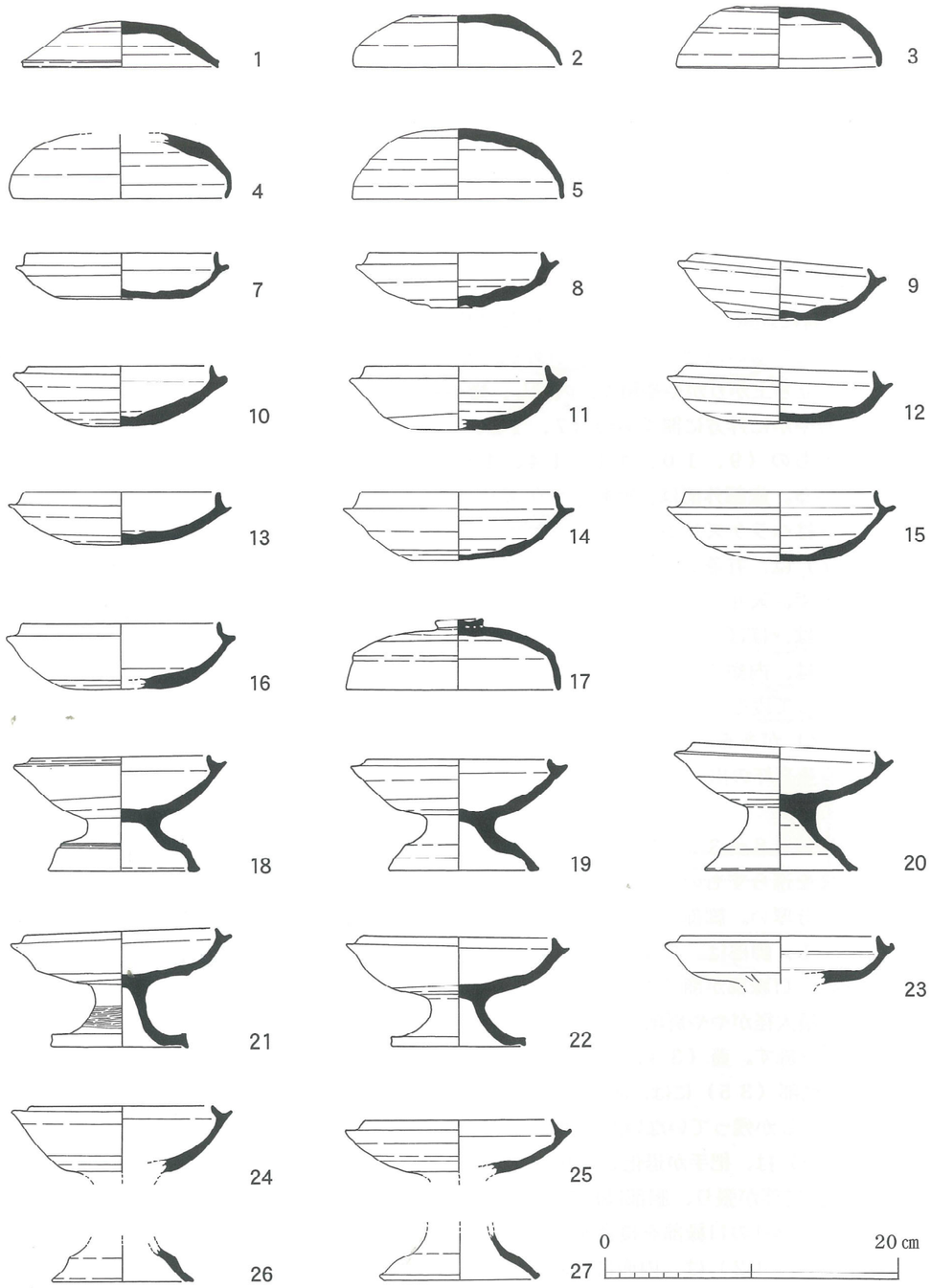
なお、有蓋高坏の出土地点は、石棺下の埋土中から見つかっており、埋葬当時のようすを示す資料である。

無蓋高坏（２８～３２）は、いずれも長脚である。坏部は、２段に突出した稜を付け、その間に刺突文を巡らすもの（３１）がある。全体に器壁が薄く、ていねいに作られている。坏底部の器壁は分厚い。脚部（２８、３０～３２）は、２段の長方形の透かしが２方または３方に穿たれている。脚部は、スカート状に開き、器壁が非常に薄く長脚である。

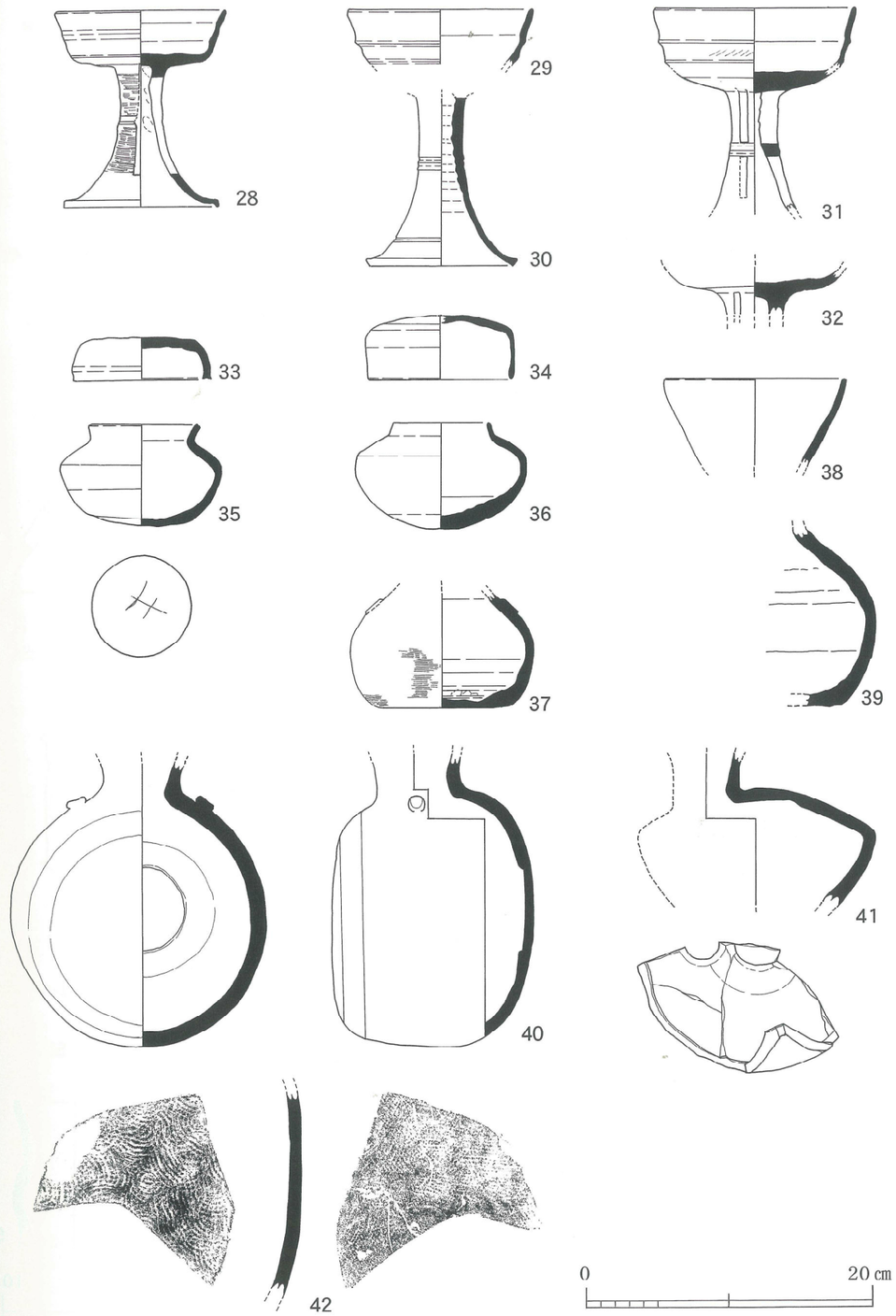
短頸壺は、口縁部が開くもの（３５）と、短く直線的に内傾するもの（３６）がある。どちらも体部の最大径がやや肩部に位置する。蓋（３３、３４）は、どちらも直線的なもので、回転ヘラケズリを施す。蓋（３４）は、焼成の様相が他のものと異なるため、搬入されたものの可能性がある。底部（３５）には、記号が見られる。３７は提瓶、３９は壺であると考えられる。口縁部片（３８）しか残っていないが、非常に薄く精巧に作られている。

提瓶（４０）は、把手が退化し、丸いボタン状のもので、全体にカキ目調整されている。平瓶（４１）は、肩部が張り、胴部は円盤閉鎖の後、中心から４cmのところに径２．５cm程度の孔を開け、別作りの口縁部を接合する。

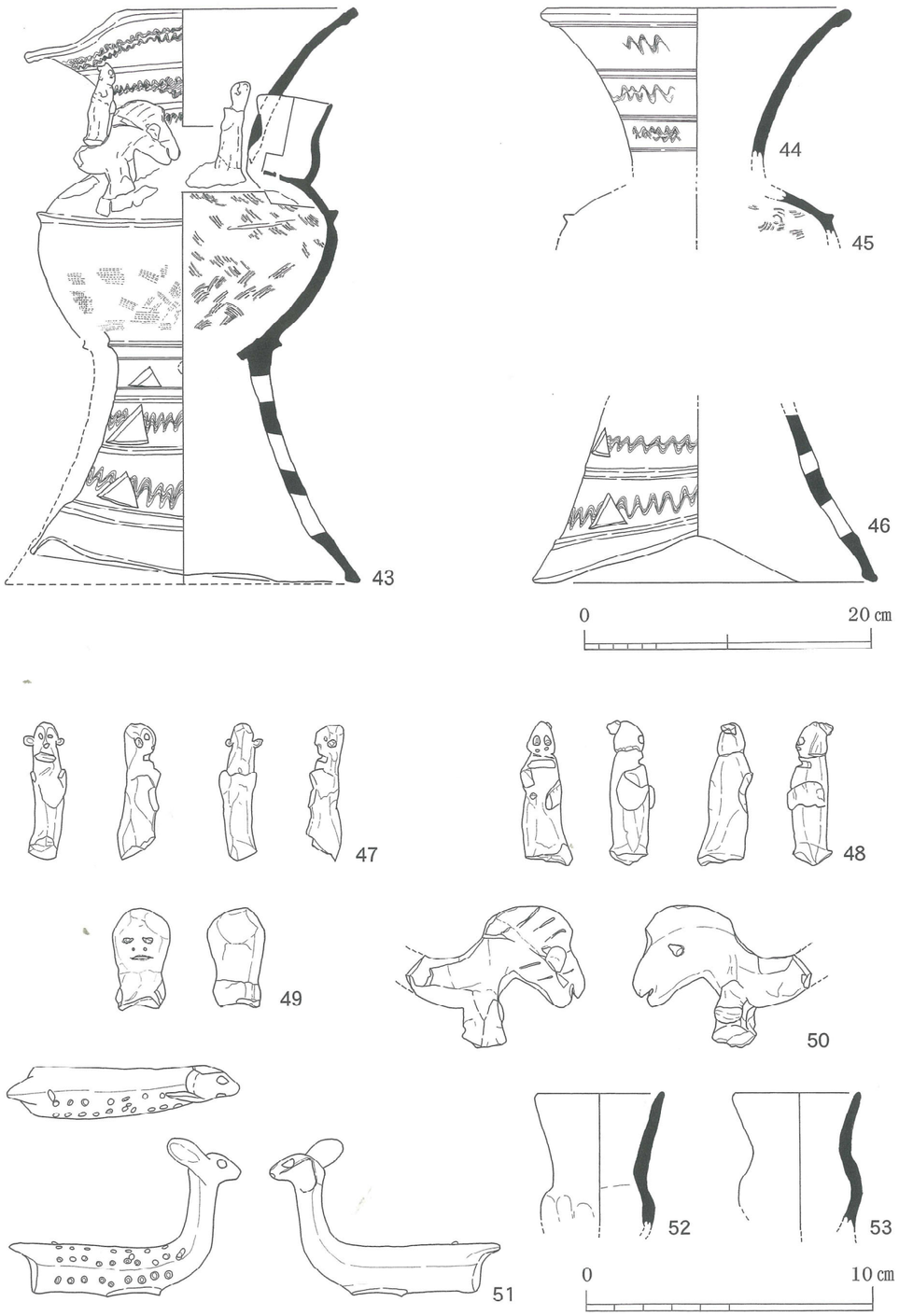
須恵器大甕（４２）は、内面には同心円状の当て具の痕跡、外面には叩き板の痕跡が残っている。他に、接合できるような破片資料は、ほぼない。隣接する東新田古墳からは、同様タイプの甕が出土しており、復元できる程の破片が残る。



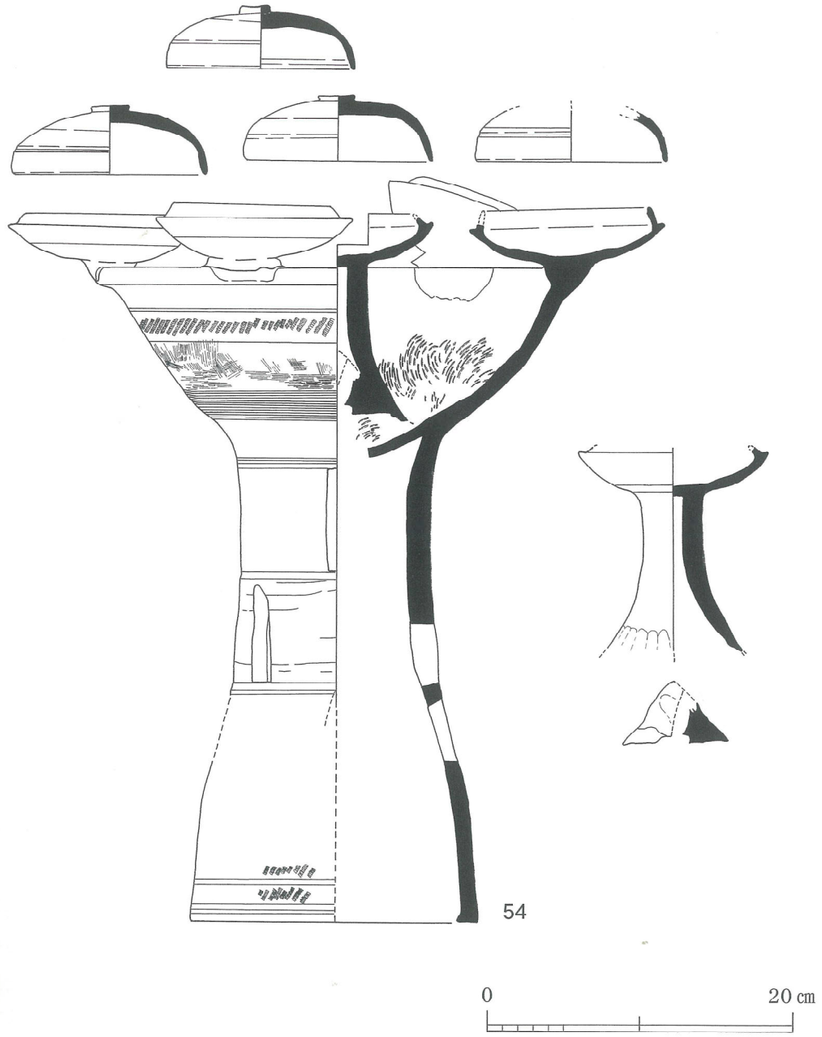
第10図　出土土器 1



第11図　出土土器 2



第12図　出土土器 3



第13図　出土土器 4

装飾付須恵器

特異な遺物として、装飾壺２個体と子持器台１個体が見つかっている。出土地点については、詳細は不明だが、第３次調査で見つかっている。

まず、接合関係から、装飾壺であると考えられる。そのうち１個体（４４、４５、４６）は、親器である壺の体部から脚部上端を欠損しているため、直接接合しないが、器高約４０ cmの大型品と考えられる。もう１つの装飾壺（４３）は、口径２３．１cm、器高４０．２cm、底径２２．５ cmの波状文を持つ広口壺で、体部中位よりやや上部に突帯が巡らされ、壺と台脚の間にも突帯がある。台脚の長さは、やや長脚で三角（やや二等辺三角形）の透かしが３段ある。脚裾部も壺の口縁部同様ゆがみがある。台付壺の突帯の上部で壺の肩に小壺や人物、動物等の小像を配置している。

小壺（５３）自体は、あまりくびれを持たず、口縁と体部最大径が同径で、器壁が薄い。小壺の底部は、少しカットされ、壺肩部の傾斜に合うように接合されている。小壺の配置より、３個体はあると考えられ、２個体が残存する。小壺の間に小像が配置されていると考えられる。いずれも壺本体から遊離した状態で出土したが、剥離痕から４７、５０が接合できた。

小像が壺の肩部表面に付けられており、人物（４７）と馬（５０）に乗る人物（４８）は、どれも手ずくねで成形されており、非常に精巧に作られ、細部にわたるまでていねいに作られている。

人物（４７）は、高さ４．８ cm、左向きで馬と人物の方向に体を向けている。顔には、目、口、鼻が表現され、顔の横からは両耳のようにつまみ出したものが、髪を両サイドに束ねたみずらの表現であると考えられる。手足が欠損しているが、腕を上方向に上げていると考えられる。

馬に乗る人（４８）は、高さ５．０５ cm、右向きである。２つ穴で目を、目の下の２つ穴は、鼻を表現しているものか不明である。目、口、首のへこみがあり、両手の袖が見える。頭部は、三角形になり、頭頂部に施釉、または０．４ cm弱の丸い粒が付いていて、１つに髪を丸めている可能性も考えられる。

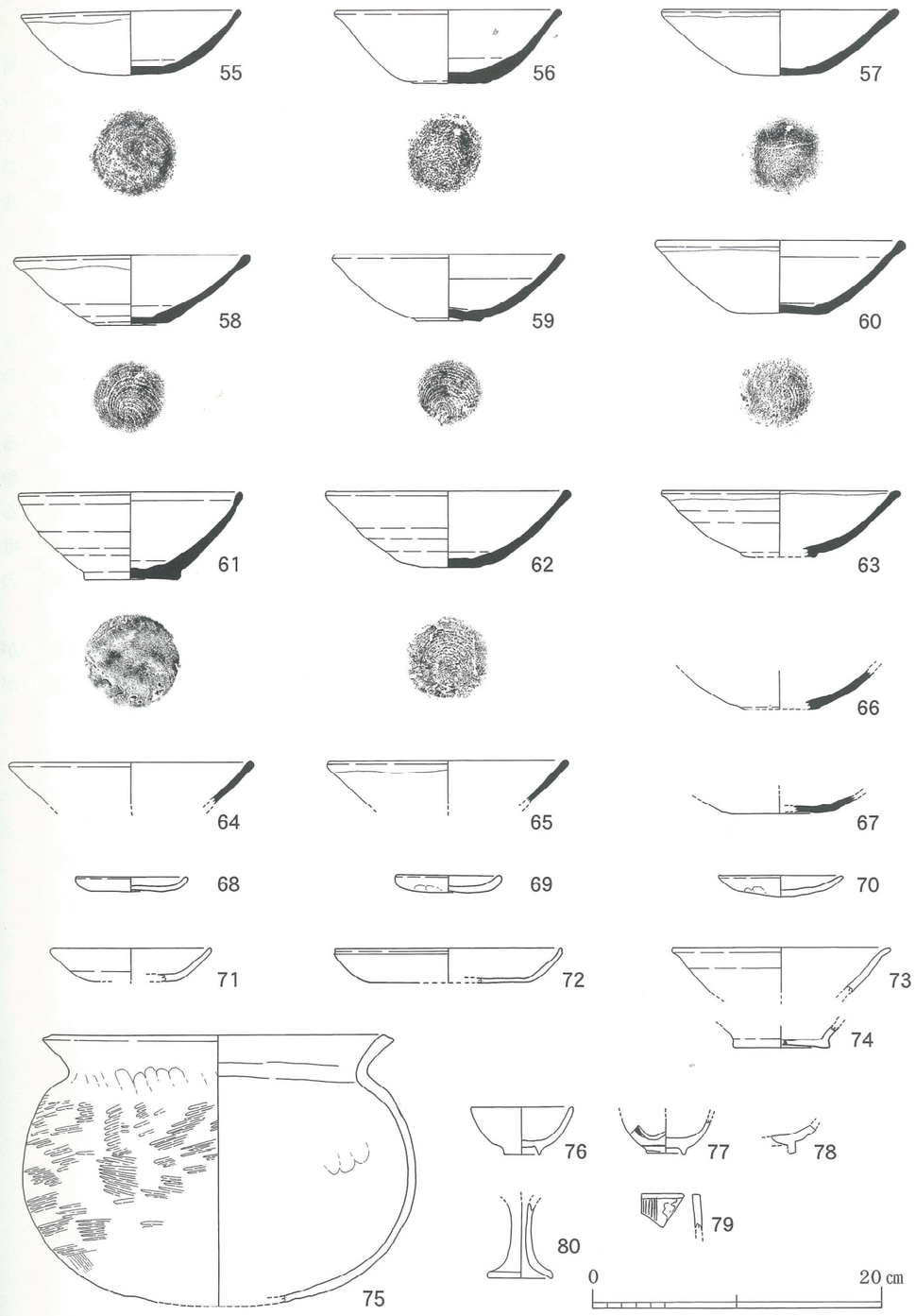
馬（５０）は、人の大きさと比較するとやや大きく、表面については、口には手綱、背中には鞍等の馬飾りや鬣表現が描かれているが、裏面にはなにも描かれていない。製作当初から意識して製作している可能性がある。

馬に乗る人は、ぎりぎり接合部分があり、馬に乗っていることが分かった。

接合できなかった小像（４９、５１）や小壺（５２）があるが、壺に付着すると考えられる。

人物の頭部（４９）は、他の人物に比べて明らかに大きさが異なり、目、口、鼻がていねいに櫛等の棒状のもので突いて表現されており、頭部は、面取りしている。

鹿（５１）の大きさは、５．５ cm×８．１ cmで、全体が手ずくねで製作され、細かい部分を作りこんでいる。まず、体部の斑点模様については、０．２ cm弱の小さい竹管状のもので差し込んでいる。ニホンジカの夏毛は、茶褐色に白い斑点が入った模様をしており、これを鹿の子と呼び、夏の季語にもなっており、この表現を行っていることから、「夏」の時期を示す可能性もある。体全体では、首が曲線状に延び、少し長いように感じる。鹿の前脚は、欠損しており、後脚については、元々表現されておらず、脚を曲げ座っている表現と思われる。顔の表現は、目や鼻は、穴が開けられ、耳は後で付着させている。鹿は、壺に付着していない。しかし、馬と同様表面はていねいな細工をしているものの、裏面については、体の斑点の表現がない。おそらく、壺側の陰部分になる面については、表現の簡略化を行っていると考えられる。そのことから、鹿も壺に付着すると考えられ、製作上、小壺と小像も壺と同じ工房で作られていると考えられる。



第14図　出土土器５

このような装飾壺は、岡山・愛媛・兵庫・大阪・和歌山等からは、人物の小像が付けられているタイプが出土しており、特に播磨地域では、人物が付いた資料が豊富に見つかっている。

子持器台（５４）は、体高４２．８cm、口径３１．６cmの鉢部を持つ。坏と蓋のセット関係が正確には分からないが、自然釉の被り方や傾き加減等からセット関係が伺えるものがある。高坏形器台の縁辺に坏６、中央に高坏１基を置く。坏は、高坏の脚部を器台の鉢部に接合する。坏蓋には、つまみがある。親器は、大きい鉢形の容器の役割を持ち、焼成の影響か、一部の子器にゆがみがあり、台脚は、焼成が不良で内外面ともに赤みのある色味をしている。器台はやや長脚で、長方形の透かしが２段あり、脚部の器壁は、非常に分厚い。

これら土器から、当古墳の最終埋葬時期は、ＴＫ２０９併行期であると考えられる。

中世以降の土器

中世の東播系の須恵器埦(山茶埦)（５５～６７）である。個体数は、破片資料も含めると１２～１４個体と考えられる。重ね焼き痕跡や胎土が似ていることから同一窯で焼かれたもので、束で持ち込まれた可能性がある。器形は、埦タイプのもの（５６、５８、５９、６１、６３）と、やや丸い底からハの字状に大きく開くもの（５５、５７、６０、６２）がある。ほぼすべての外面の口縁部に重ね焼きの痕跡が残る。口縁端部は、やや膨らみを持つものや玉縁のものがある。底部が糸きりのもので、やや小さい高台を持つものとないもの等がある。６３、６６のみ白っぽく、色調が他のものと異なる。山茶埦の時期は、１２世紀半ばから１２世紀後半のものである。土師器皿（６８～７２）、埦（７３、７４）、堝（７５）についても同様の時期のものと考えられる。

近世陶磁器類（７６～８０）は、広東碗、端反碗、小杯、猪口、仏飯器等があり、生活雑器が少ないという器種の偏りが見られた。図化を行っていないが、肥前の碗類や供養系の陶磁器類が数は少ないが出土している。

2. 金属器　（第１５～１８図）

種類は武器・馬具・農具・装身具等があり、すべて石室内部から出土している。耳環の一部は床面直上、鉄器の一部は奥壁側から出土しているというように、記録がないため漠然とした出土位置しか分かっていない。

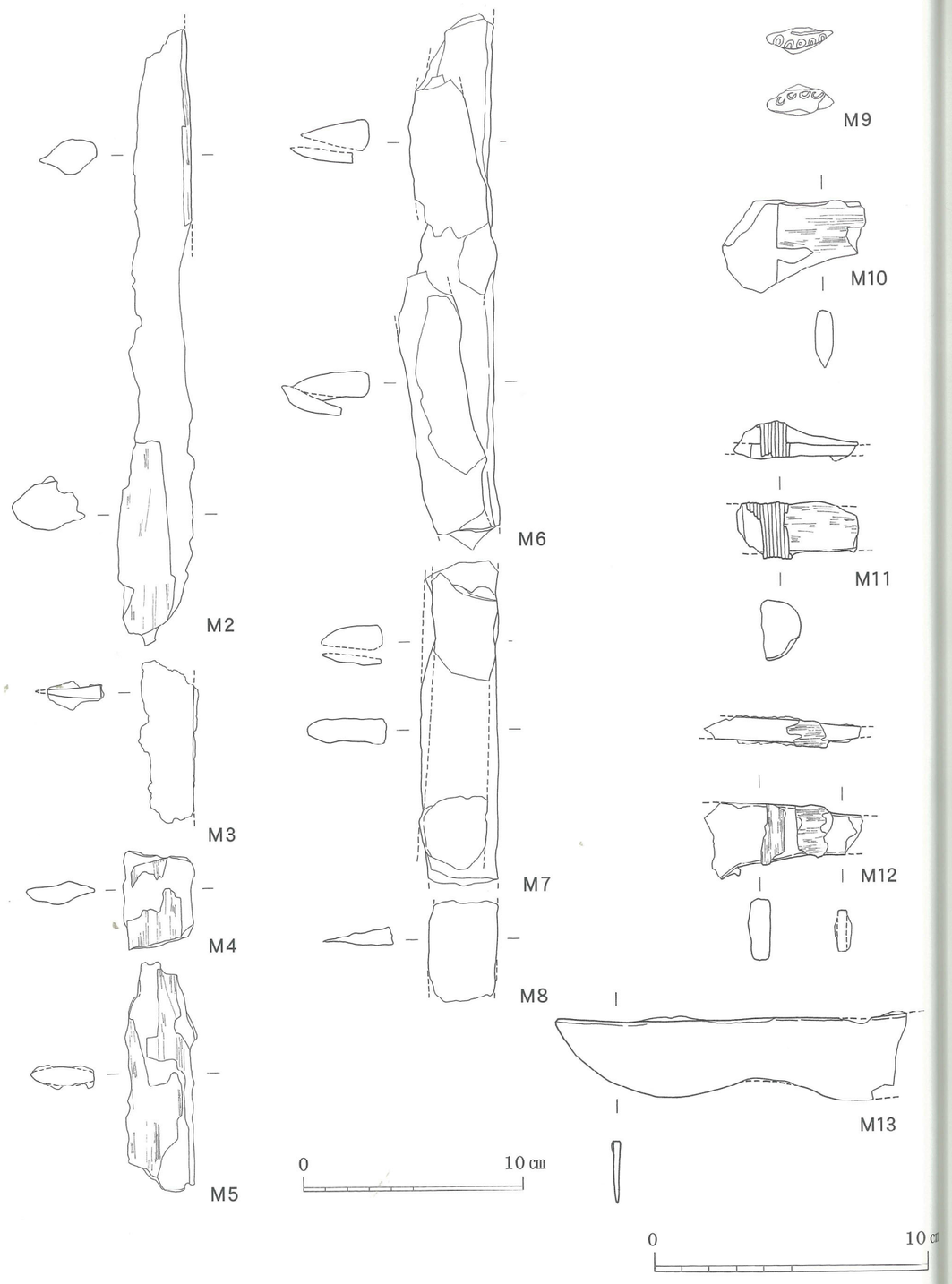
鉄器については残存状況が良好でないものがほとんどであるが、一部の馬具に鍍金が施されていることが確認できた。平成２２年度に、兵庫県立考古博物館の協力を得て、柄頭を含む土と錆で覆われた鉄器の一部についてＸ線照射したことにより、鉄器の種類等が分かった。円頭大刀柄頭については、目釘孔と象嵌の存在が確認できた。保存処理は、平成２２年度から平成２５年度に（公財）元興寺文化財研究所に委託し、実施した。

Ｍ１は円頭大刀柄頭である。横断面が倒卵形を呈しており、頭頂部がやや陥没しているが、その他、構造的には壊れておらず、内部には空洞があり、木質が挟まっているようすが伺える。

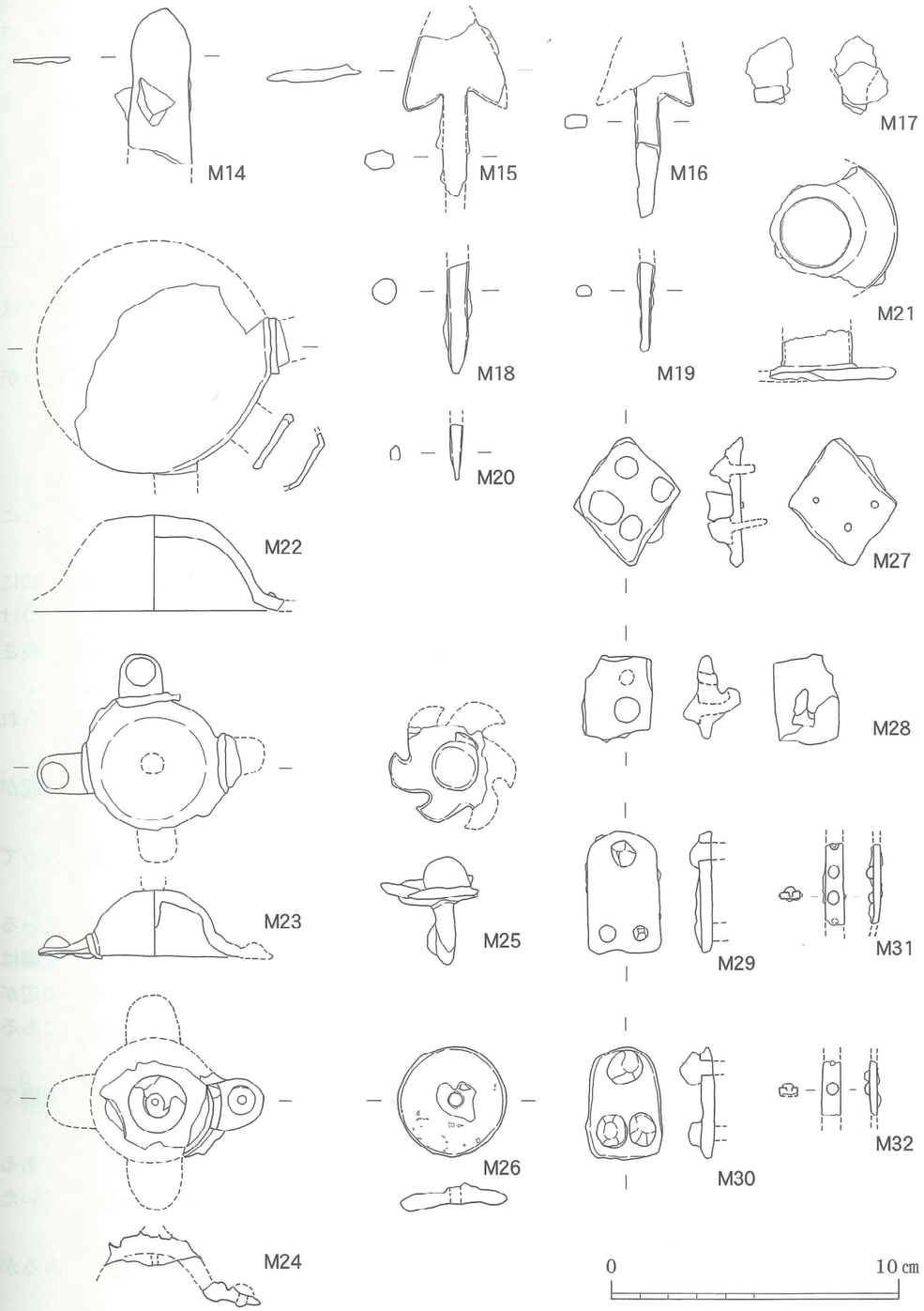
象嵌には銀が埋め込まれており、支点の環文が二重円、連結線が３本線で構成される亀甲繋文の中に鳳凰文が配される。鳳凰文は左向きで、嘴と目が表現されているものが数箇所認められるが、一部は翼部がハート形文となっている箇所、鳳凰文の頭部が二重円に簡略化されている箇所やＳ字状文で表現されている箇所がある。また、亀甲繋文の内部は旋毛状文で構成される。

旋毛状文はシンメトリックに表現されていない。目釘孔を取り囲む区画があり、１箇所は一重円文、もう１箇所は花文で飾られている。

第15図　出土金属器 1



第16図　出土金属器 2



第17図　出土金属器 3

Ｍ２～Ｍ８、Ｍ１０は大刀の刀身部分である。Ｍ２、Ｍ４、Ｍ５、Ｍ１０には木質が認められる。

Ｍ６とＭ７は、２振の大刀が重なりあっていることから、合計で少なくとも３振の大刀が副葬されていたと考えられる。

Ｍ９は銀象嵌が施された大刀の鍔の一部であると考えられる。Ｃ字状文と１本の線刻が確認できる。

Ｍ１１は刀子である。木質と銀線が１／２残っている。

Ｍ１２は刀子である。木質が残っており、関部である。

Ｍ１３は刀であると考えられる。二等辺三角形の断面を呈していることから刃部であると判断した。曲線状の部分が刃部である。残存長は１２．８ cmあるが、全体像は不明である。

Ｍ１４～Ｍ１６は鉄鏃の鏃身部である。Ｍ１４は鏃身部の先端しか残っていないため、型式は不明であるが、Ｍ１５、Ｍ１６は逆刺を有した平根の三角形鏃である。

Ｍ１７は小片であるが、長頸鏃の鏃身関部の可能性がある。平根鏃は３点見つかっているがＭ１７が長頸鏃の可能性を示すのみで、他に長頸鏃は見つかっていない。

Ｍ１８～Ｍ２０は鉄鏃の茎部であると考えられる。

Ｍ２１は不明である。中央部は空洞で、立ち上がり部分からは錫が検出されている。

Ｍ２２は雲珠である。鉢部は半球状で、脚は残存状況が悪く残っていないが、８脚あったと考えられる。鉢部の復元径は８．０ cmで高さは３．３ cmである。

Ｍ２３は辻金具である。鉢部は半球形で稜をもつ半球状有稜鉢である。稜は脚部と頂部の中間に見られ、体部断面は直線的である。鉢部径は４．７ cm、高さ２．３ cmで、頂部に飾りをつけるが、宝珠形飾りは欠損しており、鋲の脚部が残っているのみである。脚は幅１．６ cm、長さ１．６ cmの半円形４脚で、鉢と一体に作られ、径１ cm、高さ０．４ cm程の１鋲で留める。

Ｍ２４は金銅装の辻金具である。鉢の復元径４．５ cm、宝珠形飾りを有していたと考えられ、欠損しているが、痕跡から鋲頭の径は０．７ cmである。

Ｍ２５は金銅装の飾金具の座金具である。球形の鋲頭で、座金具は巴状の形、６つの突起があると考えられる。

Ｍ２６は金銅装の飾金具である。座金具は完存しており、中央に穿孔されている痕跡が残っている。

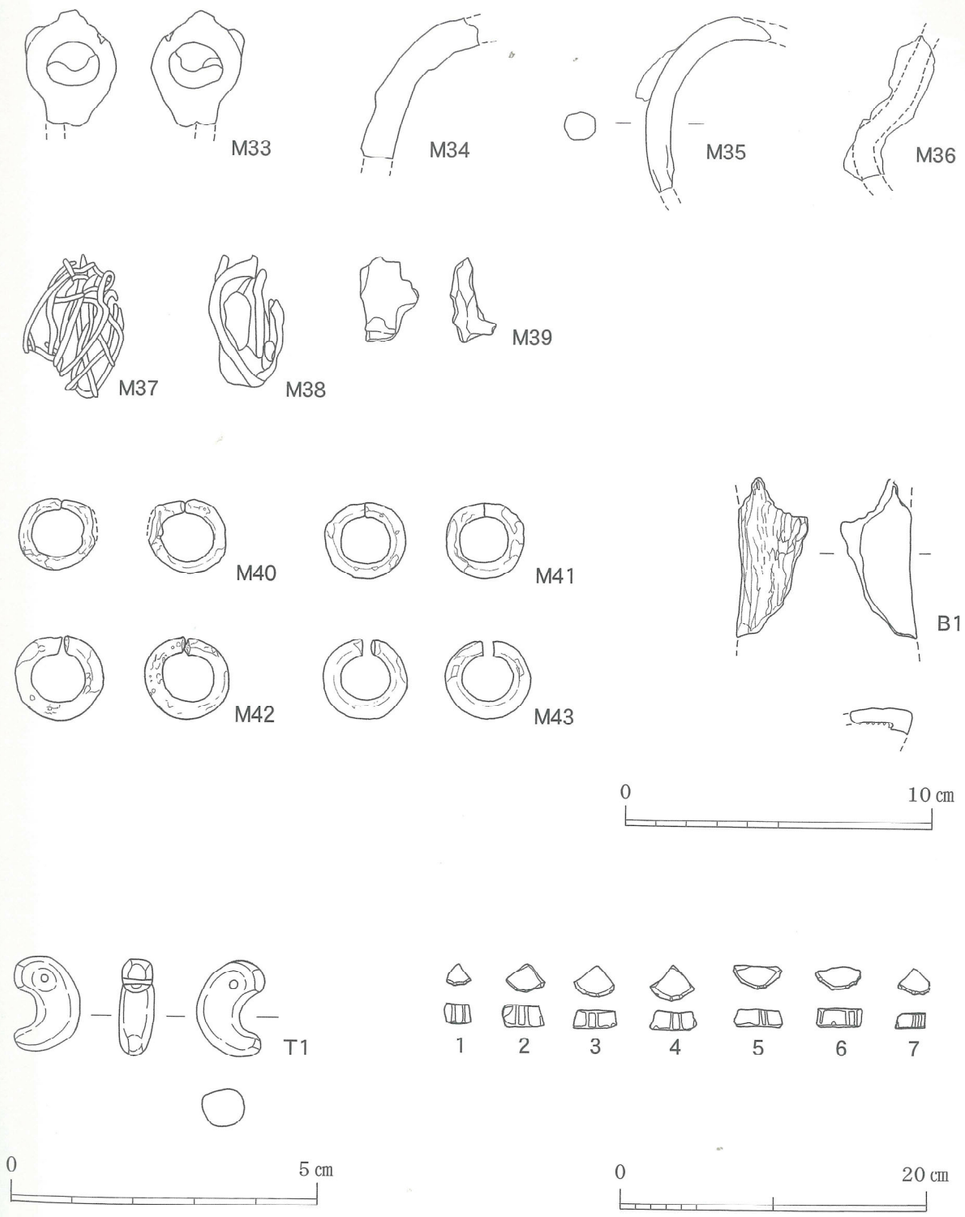
Ｍ２７～Ｍ３０は革金具である。Ｍ２７は金銅装で、菱形の鉄板に４本の鋲が付いている。Ｍ２８は欠損しているため全体像は不明であるが、鋲が２本確認でき、そのうち１本の先端は曲がっている。鋲高０．８ cm、径０．９ cmである。Ｍ２９、Ｍ３０はいずれも片側の短辺が弧状になっており、鋲が３本ずつ確認できる。Ｍ２９の鋲高は０．３ cm、径０．９ cmである。Ｍ３０は金銅装で鋲高０．７ cm、径１．０ cmである。

Ｍ３１、Ｍ３２は鞍の縁金具であると考えられる。幅０．６ cmの鉄板に、０．８ cmの間隔で鋲が打たれている。鋲頭は銀装、鉄板は金銅装である。

Ｍ３３～Ｍ３６は轡である。素環鏡板付轡と考えられ、Ｍ３５の環の直径は約７．５ cmである。Ｍ３３は引手金具であると考えられ、Ｍ３４、Ｍ３５の素環鏡板付轡に引手金具が連なっていた可能性がある。Ｍ３６は、兵庫鎖の一部である可能性がある。

Ｍ３７、Ｍ３８は針金状の鉄器である。兵庫鎖が重なり合った状態である可能性もあるが、直径が０．２ cmと細いため、不明である。

Ｍ３９は不明である。



第18図　出土金属器４・その他遺物

Ｍ４０～Ｍ４３は耳環である。Ｍ４０は床面から２０ cm程度残したベルトの中から、Ｍ４１は床面直上から見つかった。Ｍ４２、Ｍ４３の出土地点は不明である。Ｍ４２のみ銅芯銀貼であり、他は銅芯金貼である。

Ｍ４０は復元長径２．６ cmで、短径２．３ cm、接面は０．１ cmで絞り込んでいる。断面は、径０．４ cmである。

Ｍ４１は長径２．６ cmで、短径２．５ cm、接面は０．０５ cmで、断面は、長径０．５cmである。

Ｍ４２は長径３．０ cmで、短径２．８ cm、接面は０．１ cmで絞り込んでいる。断面は、長径０．６ cmである。

Ｍ４３は長径２．８ cmで、短径２．６ cm、接面は０．３ cmで、断面は長径０．６ cmである。

3.その他　（第１８図）

玉類はＴ１の勾玉１点のみである。ガラス製で、青色を呈している。穿孔は両面から施される。

Ｂ１は人骨であり、出土場所は不明である。

その他１～７は無機質のもので、成分は硫酸カルシウムである。焦げたような臭いがあり、敷石の隙間と奥床面上から出土した。

遺物観察表

土器観察表

番号	種別	器種	遺構	法量(cm) 口径	器高	底径	調整 外	内	備考
1	須恵器	坏蓋		13.2	3.15		回転ヘラケズリ		
2	須恵器	坏蓋	石室床面直上	14.1	3.05		回転ヘラケズリ		
3	須恵器	坏蓋		13.7	4.3		回転ヘラケズリ		
4	須恵器	坏蓋		(14.4)	残 4.4		回転ナデ		
5	須恵器	坏蓋		14.3	4.7		回転ヘラケズリ		
7	須恵器	坏身	石室内埋土	(13.2)	3.1	(9.6)	回転ナデ		
8	須恵器	坏身		11.8	3.75	7.4	ヘラ切り未調整	仕上げナデ	
9	須恵器	坏身		11.9	4.5	6.4	ヘラ切り未調整		顔料付着
10	須恵器	坏身	石棺下２	12.4	4.05	6.3	回転ヘラケズリ		
11	須恵器	坏身		12.5	4.35	6.7	回転ヘラケズリ		
12	須恵器	坏身	石棺下	13.0	3.9	8.6	回転ヘラケズリ　仕上げナデ	仕上げナデ	
13	須恵器	坏身	石棺下５	13.2	3.6	5.6	回転ヘラケズリ		ヘラ記号あり
14	須恵器	坏身		13.3	4.75	7.3	回転ヘラケズリ　仕上げナデ		
15	須恵器	坏身		13.0	4.8	7.9	回転ヘラケズリ　仕上げナデ		
16	須恵器	坏身		(13.5)	4.45	(6.8)	回転ヘラケズリ		
17	須恵器	高坏蓋		14.5	4.9		回転ヘラケズリ　カキ目	仕上げナデ	
18	須恵器	有蓋高坏	石棺下３	12.1	7.9	10.3	回転ヘラケズリ		
19	須恵器	有蓋高坏	石棺下４	12.6	7.6	10.3	回転ヘラケズリ		
20	須恵器	有蓋高坏		12.4	8.8	10.4	回転ヘラケズリ		
21	須恵器	有蓋高坏	石棺横	13.2	8.1	9.35	回転ヘラケズリ		
22	須恵器	有蓋高坏	石棺下１	13.2	7.5	9.3	回転ヘラケズリ	ユビオサエ	
23	須恵器	有蓋高坏		(13.4)	残 3.3	(11.2)	回転ヘラケズリ		
24	須恵器	有蓋高坏		(12.4)	残 4.6	(7.6)	回転ヘラケズリ		外面に自然釉
25	須恵器	有蓋高坏		(12.8)	残 3.7				外面に自然釉
26	須恵器	高坏脚部か			残 2.45	(9.6)			
27	須恵器	高坏脚部			残 3.25	(11.0)			
28	須恵器	無蓋高坏		(11.8)	13.75	(10.8)			２段２方透かし　沈線
29	須恵器	無蓋高坏		(13.0)	残 3.8				
30	須恵器	高坏脚部	石室内埋土		残 11.8	(10.0)			２段３方透かし　沈線
31	須恵器	無蓋高坏		(14.0)	残 14.05		刺突文		２段３方透かし
32	須恵器	無蓋高坏	前庭部		残 3.2				２段３方透かし
33	須恵器	盌	前庭部	9.7	3.05		回転ナデ　仕上げナデ		
34	須恵器	蓋	前庭部	(10.0)	4.45		回転ヘラケズリ		
35	須恵器	短頸壺	石室入口	8.0	7.15	6.65	底部未調整	ナデ	
36	須恵器	短頸壺	前庭部	(6.8)	7.4	7.8	底部未調整	当て具痕	
37	須恵器	提瓶	前庭部		残 8.1	(9.4)	カキ目		外面に自然釉
38	須恵器	壺			残 6.1				内外面に自然釉
39	須恵器	壺			残 12.5				外面に自然釉
40	須恵器	提瓶			残 20.5	17.9	カキ目		
41	須恵器	平瓶	前庭部		残 10.6				外面に自然釉
42	須恵器	甕			残 14.4		タタキ目	同心円タタキ目	
43	須恵器	装飾壺		23.1	40.2	22.5	波状文　タタキ目	同心円タタキ目	ゆがみあり
44	須恵器	装飾壺		(22.1)	残 11.2		波状文		
45	須恵器	装飾壺			残 3.4			同心円タタキ目	
46	須恵器	装飾壺		24.0	残 11.7		波状文		ゆがみあり
47	須恵器	装飾壺			4.8×1.3				小像（人物）
48	須恵器	装飾壺			5.05×1.4				小像（人物）
49	須恵器	装飾壺			3.6×2.0				小像（人物）
50	須恵器	装飾壺			6.3×5.0				小像（馬）
51	須恵器	装飾壺			5.5×8.1				小像（鹿）
52	須恵器	装飾壺		4.4	4.7		ロクロナデ		小壺
53	須恵器	装飾壺		4.6	4.9		ロクロナデ		小壺
54	須恵器	了持器台		42.8	31.6		櫛先列点文　波状文	同心円タタキ目	
55	須恵器	山茶埦		15.0	4.4	6.6	回転ナデ	仕上げナデ	底部糸切り
56	須恵器	山茶埦		15.5	5.05	5.7	回転ナデ		底部糸切り
57	須恵器	山茶埦		16.0	4.5	6.4	回転ナデ		底部糸切り
58	須恵器	山茶埦		16.1	4.8	5.5	回転ナデ		底部糸切り
59	須恵器	山茶埦		(16.0)	4.45	4.5	回転ナデ		底部糸切り
60	須恵器	山茶埦		(17.0)	残 5.05	(5.6)	回転ナデ		底部糸切り
61	須恵器	山茶埦		15.3	6.0	6.4	回転ナデ		底部糸切り
62	須恵器	山茶埦		(17.0)	5.15	(6.4)	回転ナデ		底部糸切り
63	須恵器	山茶埦		(16.4)	4.45	(5.2)	回転ナデ		
64	須恵器	山茶埦		(16.8)	残 2.9		回転ナデ		
65	須恵器	山茶埦		(16.5)	残 2.9		回転ナデ		
66	須恵器	山茶埦			残 2.75	(5.6)	回転ナデ		
67	須恵器	山茶埦			残 1.1	(7.8)	回転ナデ		底部糸切り
68	土師器	小皿		(7.6)	1.05	(6.2)	ユビオサエ		
69	土師器	小皿		(7.3)	1.2	(5.8)	ユビナデ		
70	土師器	皿		(8.6)	1.4	(4.0)			
71	土師器	皿		(11.0)	残 2.3	(6.4)			
72	土師器	皿	石棺下	(15.6)	2.4	(11.0)			
73	土師器	埦		(15.0)	残 3.2				
74	土師器	埦			残 1.5	(6.6)			底部糸切り
75	土師器	鍋		(24.3)	残 18.5	18.8	タタキ		
76	陶磁器	碗		7.0	3.2	2.6			
77	陶磁器	碗			残 2.4	2.6			
78	陶磁器	碗			残 1.6				
79	陶磁器	碗			残 2.5				
80	陶磁器	高杯			残 5.3	4.4			

出土金属器　法量表

番　号	種　別	分　類	器　種	遺　構	全長（cm）	幅（cm）	厚み（cm）	備　　考
M 1	鉄器	武器	大刀柄頭	石室床面	残 8.0	4.0	3.4	銀象嵌
M 2	鉄器	武器	大刀		残 28.2	残 3.4	2.0	木質
M 3	鉄器	武器	大刀	1 北	残 7.45	残 2.5	0.6	
M 4	鉄器	武器	大刀		残 4.5	残 3.3	0.5	木質
M 5	鉄器	武器	大刀	1 北	残 10.5	残 3.3	0.9	木質
M 6	鉄器	武器	大刀	石室床面	残 24.6	3.5	1.4	2 振
					残 12.1	3.0	0.5	
					残 7.5	3.1	0.5	
M 7	鉄器	武器	大刀	石室床面	残 14.9	3.5	1.1	2 振
					残 4.8	3.0	0.4	
M 8	鉄器	武器	大刀	石室床面	残 4.7	3.1	0.9	
M 9	鉄器	武器	大刀		残 2.5	残 1.1		銀象嵌
M10	鉄器	武器	大刀		残 5.2	残 3.5	0.8	木質
M11	鉄器	農工具	刀子		残 4.5	2.1	1.3	銀線　木質
M12	鉄器	農工具	刀子	溝 2	残 5.7	残 3.0	0.4	木質
M13	鉄器	武器	刀か	石棺下	残 12.8	3.0	0.3	
M14	鉄器	武器	鉄鏃		残 5.5	2.2	0.2	
M15	鉄器	武器	鉄鏃		残 6.2	3.6	0.7	
M16	鉄器	武器	鉄鏃		残 5.0	残 2.0	0.5	木質
M17	鉄器	武器	鉄鏃		残 2.7	残 1.5	0.6	
M18	鉄器	武器	鉄鏃		残 3.8	0.8	0.9	
M19	鉄器	武器	鉄鏃		残 3.1	0.5	0.35	
M20	鉄器	武器	鉄鏃		残 1.95	0.5	0.5	
M21	鉄器	不明	不明		残 4.4		残 1.8	錫
M22	鉄器	馬具	雲珠		残 7.4		3.3	
M23	鉄器	馬具	辻金具		残 7.1		残 2.3	
M24	鉄器	馬具	辻金具		残 5.6		残 2.9	金銅装
M25	鉄器	馬具	飾金具		残 3.4	残 3.4	3.7	金銅装　巴状
M26	鉄器	馬具	飾金具		3.8		0.4	金銅装
M27	鉄器	馬具	革金具		4.5	3.7	2.1	金銅装
M28	鉄器	馬具	革金具	石棺下	3.0	2.5	1.9	
M29	鉄器	馬具	革金具		4.2	2.7	0.7	
M30	鉄器	馬具	革金具		3.9	2.8	1.1	金銅装
M31	鉄器	馬具	鞍金具	溝 2	残 2.85	残 0.6	0.5	金銅装　鋲は銀貼
M32	鉄器	馬具	鞍金具	溝 2	残 1.9	残 0.6	0.4	金銅装　鋲は銀貼
M33	鉄器	馬具	轡		残 3.9	3.0		
M34	鉄器	馬具	轡		残 5.5	1.1		
M35	鉄器	馬具	轡		残 6.4	0.9	1.1	
M36	鉄器	馬具	轡	石室内埋土	残 5.2	残 1.3		
M37	鉄器	不明	不明		5.4	4.0		
M38	鉄器	不明	不明		4.4	2.4		
M39	鉄器	不明	不明		残 2.8	残 2.0	残 1.4	
M40	その他	装身具	耳環		2.3	2.6	0.4	銅芯金貼
M41	その他	装身具	耳環		2.5	2.6	0.5	銅芯金貼
M42	その他	装身具	耳環		2.8	3.0	0.6	銅芯銀貼
M43	その他	装身具	耳環		2.6	2.8	0.6	銅芯金貼

出土玉類　法量表

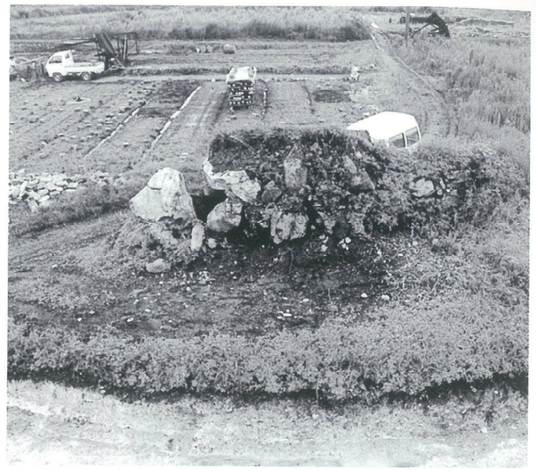
番　号	種　別	分　類		遺　構	全長（cm）	幅（cm）	厚み（cm）	備　　考
T 1	玉	勾玉			1.6	1.1	0.6	ガラス製

その他遺物　法量表

番　号	種　別	分　類		遺　構	全長（cm）	幅（cm）	厚み（cm）	備　　考
1	不明			石室奥床面直上	1.6	1.4	1.2	
2	不明			石室奥床面直上	2.5	1.8	1.4	
3	不明			石室奥床面直上	2.6	2.0	1.2	
4	不明			石室奥床面直上	2.9	2.2	1.2	
5	不明			石室奥床面直上	3.1	1.5	1.0	
6	不明			石室奥床面直上	2.9	1.5	1.2	
7	不明			石室奥床面直上	1.9	1.6	1.0	
B 1	骨	人骨			5.0	2.0		

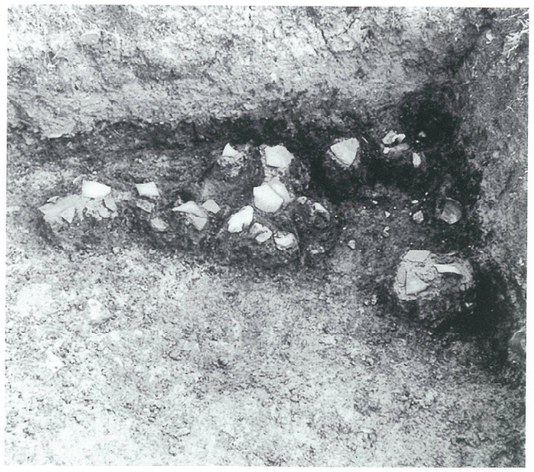
写 真 図 版

遠景（東から）



全景（北から）

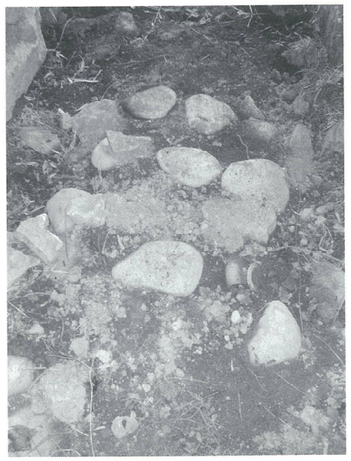
前庭部土器出土状況（東から）



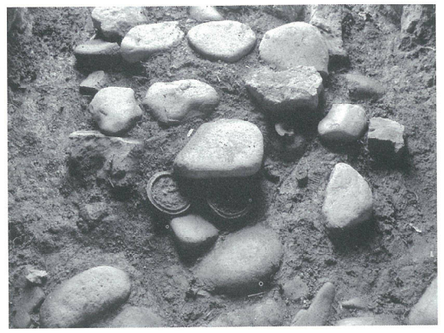
前庭部土器出土状況（北から）

周溝検出状況

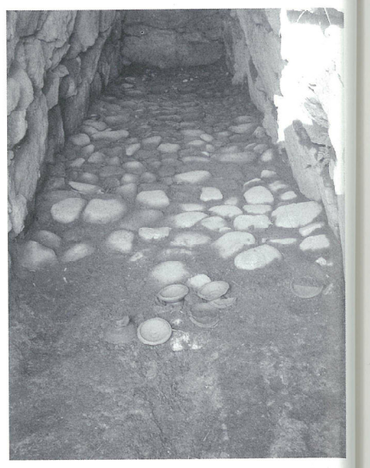
周溝確認調査状況



石棺除去後状況

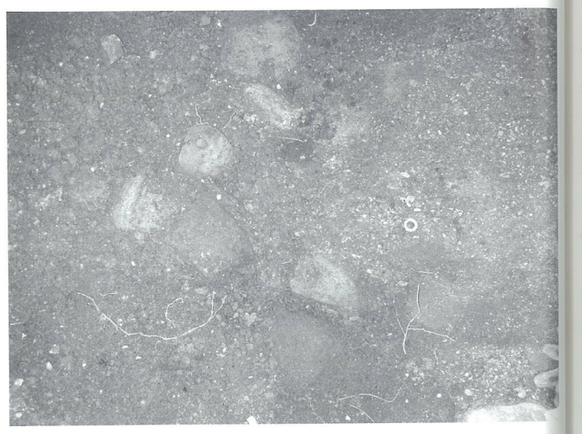


石棺下遺物出土状況



羨道部から奥壁（西から）

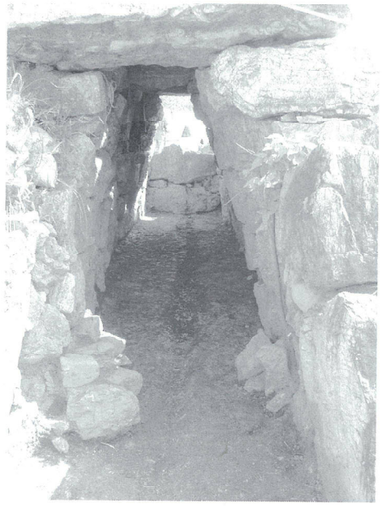
石室奥壁付近



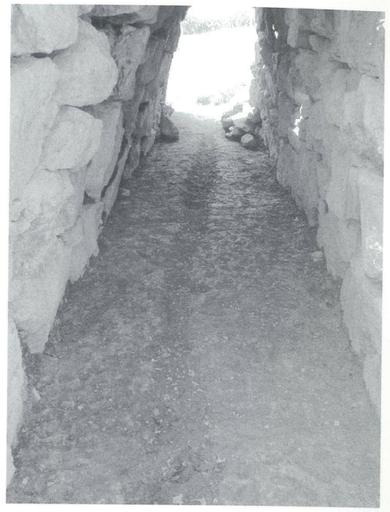
耳環、高坏蓋出土状況

開口部から石室

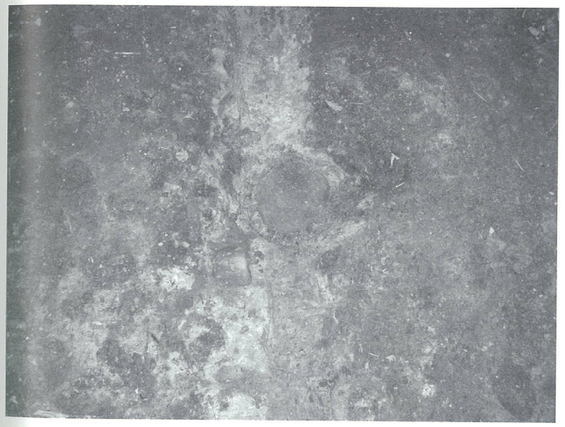
石室内作業風景



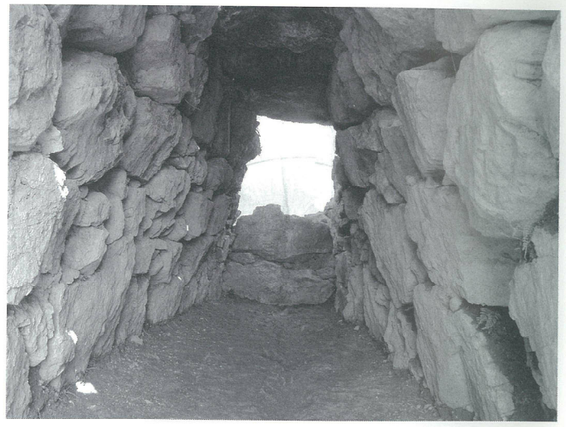
排水溝検出状況（西から）



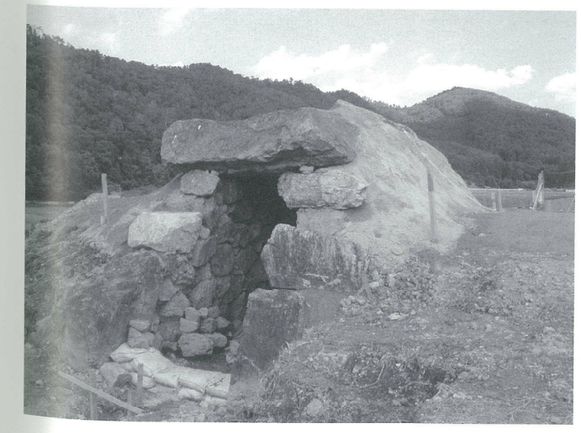
排水溝検出状況（東から）



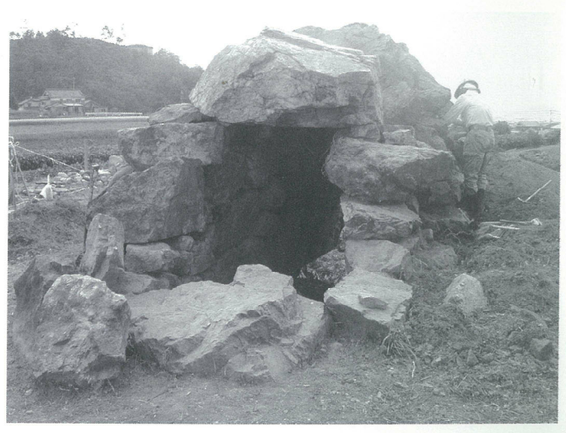
奥壁付近排水溝



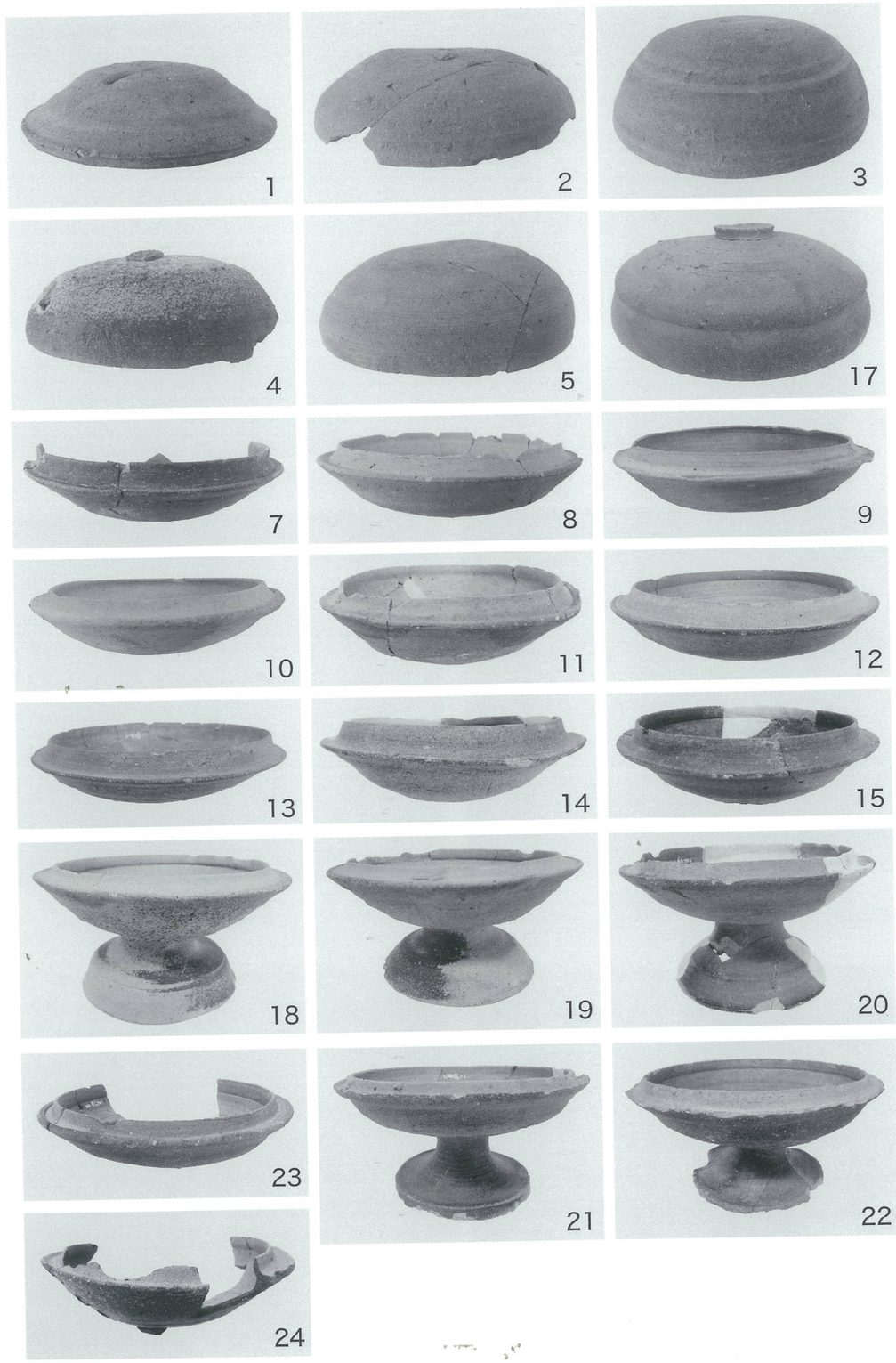
石室内（西から）



復元作業（南西から）



復元作業（北東から）

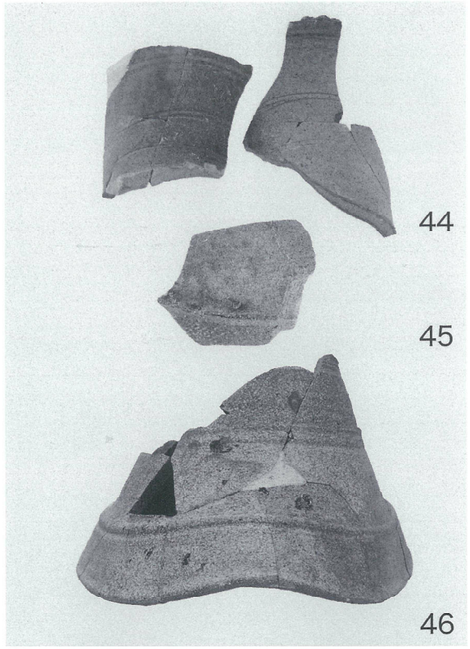

1
2
3
4
5
17
7
8
9
10
11
12
13
14
15
18
19
20
23
21
22
24

出土遺物１

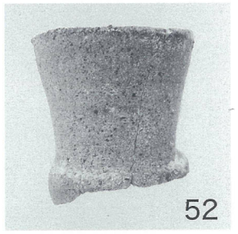
28
30
31
33
34
35
36
40
37
38
42
41

出土遺物２

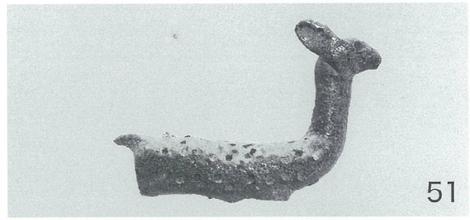
43

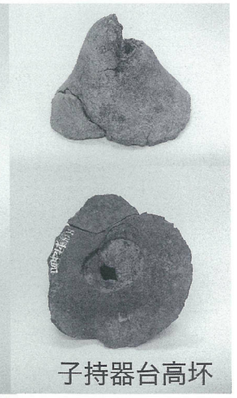

44
45
46

49

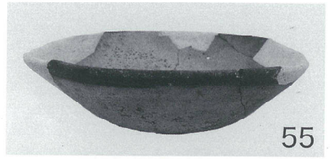

52

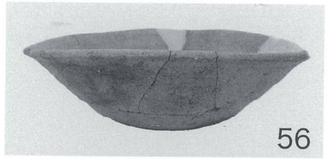
54

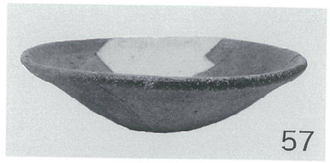

51

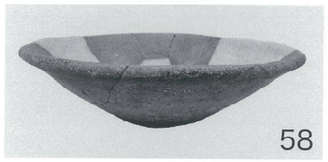

子持器台高坏

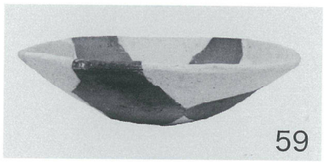
出土遺物３

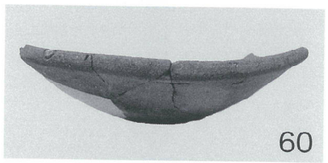

55

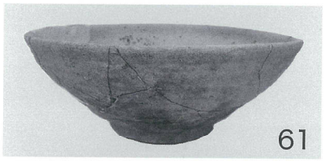

56

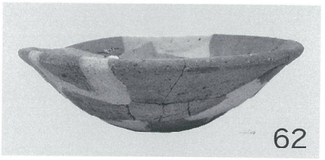

57


58

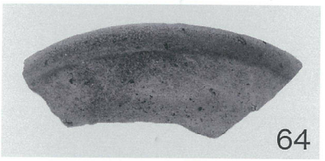

59

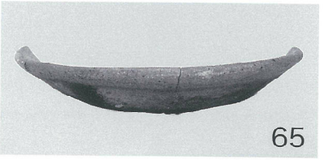

60

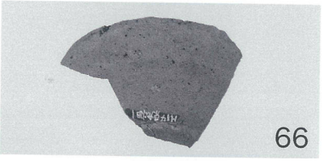

61

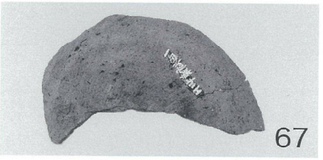

62

63

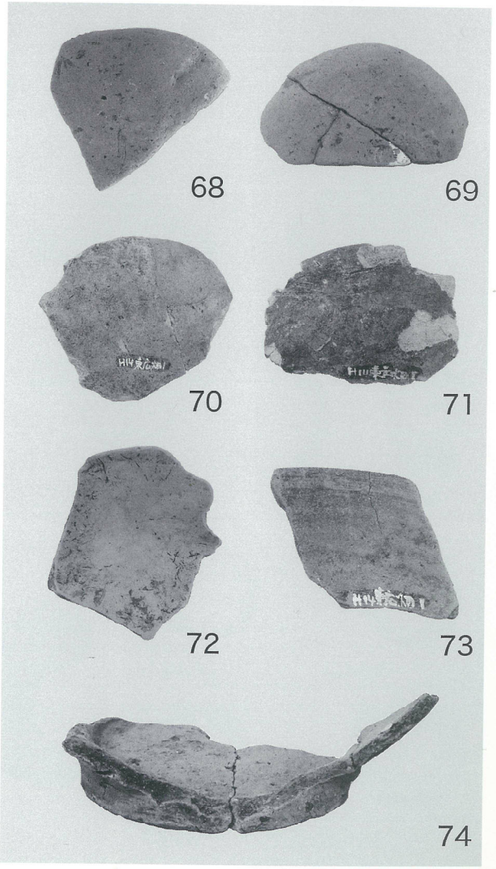

64

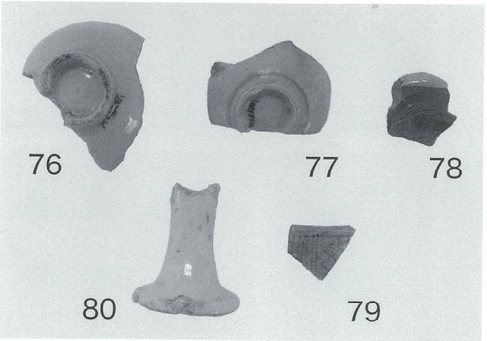

65


66

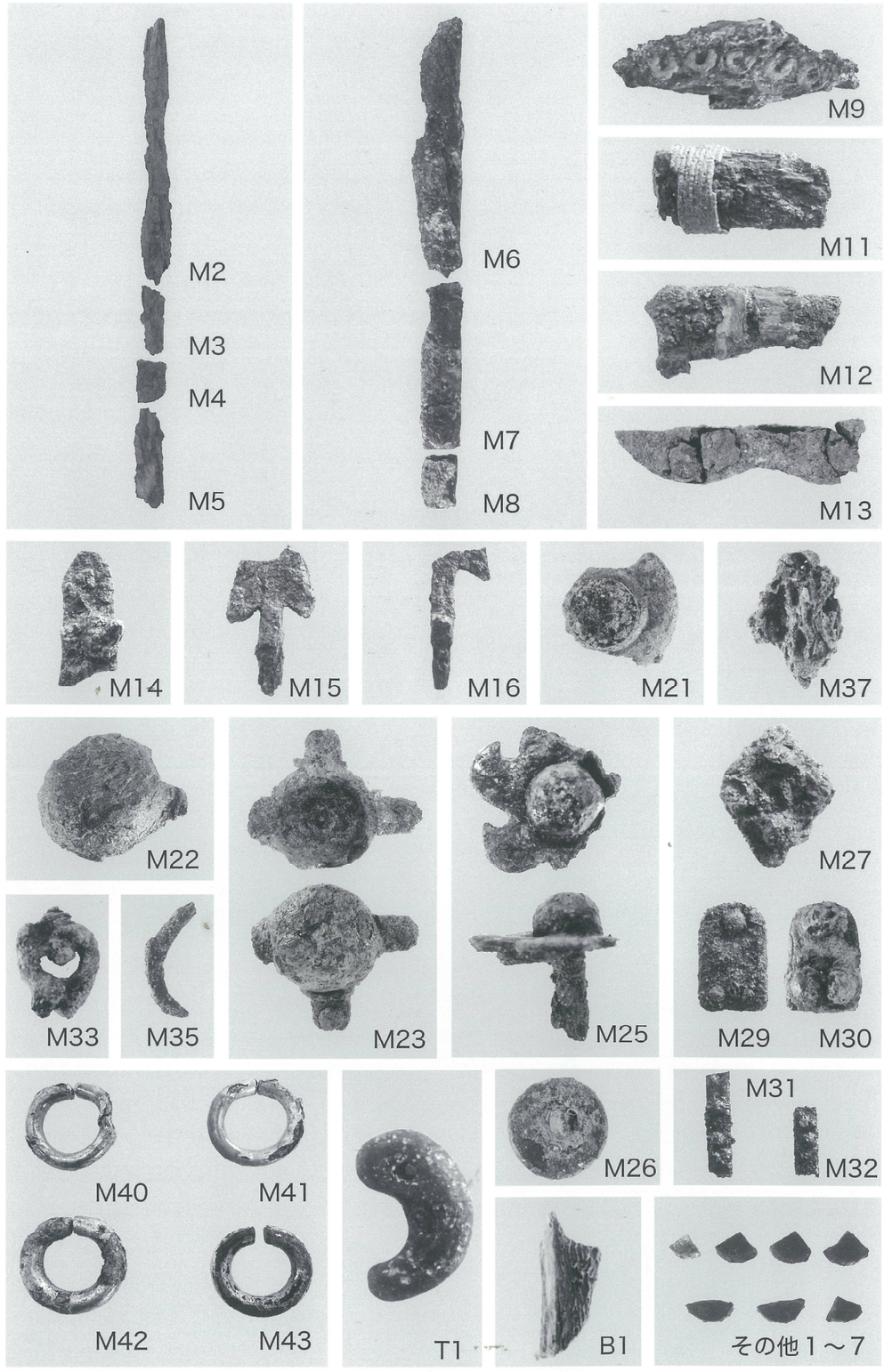

67

75


68
69
70
71
72
73
74


76
77
78
80
79

出土遺物４



出土遺物５

報告書抄録

ふりがな	ひがしひろはたこふん　いち
書名	東広畑古墳Ⅰ
副書名	
シリーズ名	福崎町埋蔵文化財調査報告書13
シリーズ番号	13
編著者名	樋口　碧　　古田　陽（現姓　小船井）
編集機関	福崎町教育委員会
所在地	〒679-2280　兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1　TEL0790-22-0560
発行年月日	2015年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
東広畑古墳（ひがしひろはたこふん）	兵庫県神崎郡福崎町西田原字東広畑626（ひょうごけんかんざきぐんふくさきちょうにしたわらあざひがしひろはた）	28443	410028	34度57分41秒	134度46分1秒	1993年7月6日～1993年8月31日	100㎡	ほ場整備
						1995年3月15日～1995年3月29日	60㎡	ほ場整備
						2002年10月1日～2003年3月31日	100㎡	遺跡整備
						2008年9月～2008年12月	10㎡	古墳公園

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東広畑古墳	古墳	古墳時代後期	横穴式石室	須恵器（装飾付須恵器・坏・高坏・短頸壺）・金属器（象嵌柄頭・大刀・馬具・鉄鏃・耳環）・勾玉ほか	
		中世以降		須恵器・土師器・陶磁器	

2015年3月31日　印　刷
2015年3月31日　発　行

東広畑古墳Ⅰ
福崎町埋蔵文化財調査報告書13

著作権　兵庫県神崎郡福崎町南田原3116－1
発行者　福崎町教育委員会

印刷者　クリヤ印刷所